最新女子國文讀本

巻四

375.9
So19
資料室

42324
教科書文庫
4
810
42-1934
2000301818

資料室
3769
Sa19

文部省檢定濟
昭和九年一月二日・高等女學校國語科用

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

最新女子國文讀本

湯川弘文社

錦楓

森寛齋筆

廣島大學圖書之印

文學博士 河田 羆 寄贈

文學博士 [illegible] 所

廣島大學圖書館 35759 貴重本

最新女子國文讀本　卷四

目次

一　神域　溝口白羊　一
二　乃木將軍　櫻井忠溫　一六
三　文章道　島崎藤村　二七
四　田園雜興　大町桂月　三四
五　隨感二題　四三
一　朝顏　〔雲萍雜志〕　四三

二立志　四五
六林の道　四七
七松坂の一夜　四九
八本居宣長の母　五七
九淺間裾野の晩秋　六六
一〇絲瓜の棚　七三
一一新義州より奉天まで　七五
一二七株松　八四
一三朝の海　九〇
一四根の營　九八
〔大和俗訓〕　杉浦翠子　安倍能成　落合直文　吉田絃二郎　和辻哲郎

一五はやり詞　新村出　一〇七
一六日蓮上人の人格　高山樗牛　一一六
一七兵營參觀　齋藤瀏　一二一
一八簡單より複雜へ　丘淺次郎　一三三
一九我が文化の將來　田中寛一　一四一
二〇昭和日本　德富猪一郎　一四八
〔自修文〕
一蜜蜂　土岐善麿　一五七
二雁の聲　齋藤茂吉　一六三
三亡兆　菊池寛　一六六

附錄
常用漢字表
正俗字表

廣島文理大圖書之印

最新女子國文讀本　卷四

一　神　域

代々木の森
東京市澁谷區代々幡町にあり。

快美な色彩の反射と和かい感觸とをもつた秋の陽光に包まれてゐる代々木の森。私はそれを仰ぎながら、そして何處からともなく高くにほつて來る新しい檜の香をかぎながら、幾度其處を通つたことであらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。

金屬的の響

曳々聲

衝動
ショウドウ。

竣工

或時は、無數の蟻の集團が大きな餌を引くやうに、六七丈程もある大きな獻木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら曳々聲して森の中へ引入れるのを見たこともあつた。

あの中に明治神宮が建つのだと、さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懷かしさが充溢した。そして毎日のやうに其處を通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つて行くのが、たまらない程嬉しく思はれた。

其の明治神宮がたうとう竣工を告げた。

清々しい

幽邃
イウスヰ。

流造
「ながれはふづくり」ともいふ。側面は破風造で棟から前の軒先までを、棟から後の軒先までより長くして、そりをもたせたる造りかた。

素木
シラキ。

かつて赤土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも竝んで、烈しい日に光つてゐるのを見た處には、今清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常綠の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡された御料地は、いつの間にやら、すつかり見ちがへる程美しい景色になつて、森嚴と幽邃との趣を兼ね備へた鬱蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隱れつしてゐるのが、何ともいへない神々しい感じを起させる。

神域。眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と優雅との領土。私ははじめて完成した明治神宮の神苑に立つ

延人員　工事に使用せし總人員を一日一人の割合に計算すること。

尺〆　切口一尺四方、長さ二間の材木を尺〆一本といふ。

千載不動

二柱

た時、其の改まつた光景を見て、今更のやうに強烈な感激に打たれた。何者の力が此の新しい建設の事業を完成させたのであらう。造營局の記錄の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十萬人であり、用材の總計が尺〆一萬九千本であるといふやうな事が、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越して隱れた部面に働いた強い力こそ、實に此の明治神宮の基礎を千載不動の固さに築きあげたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御仁慈と、此の二柱の大神の御惠に對へ奉る國民の至純なる感謝の心情と、此の三つのものが、陰に陽に工程の進

國民崇敬の標的

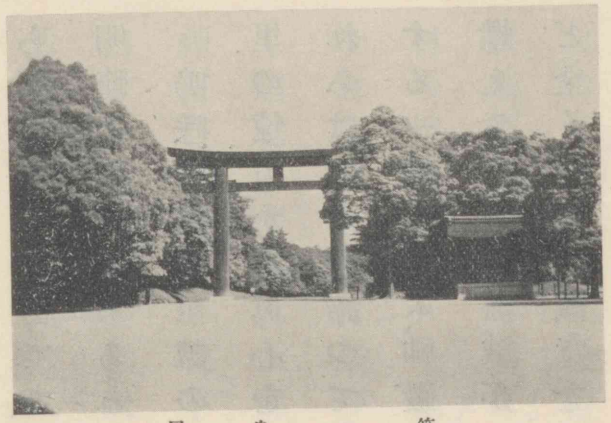
捗を刺戟して、遂に此の記念すべき大工事を完成するに至らしめた原動力であることは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實であるといはねばならぬ。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た青年團の造營奉仕、數百里の遠方から眞心をこめて輸送して來た無數の獻木。それらは何事を語つてゐるか。實に此の神宮の御苑を形成する一株の樹木、神殿を組織する一本の柱にも悉く國民の燃えるやうな熱誠がこもつてゐるのである。かくして、殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。何といふ美しい、尊い事實であらう。

刹那

肅然　シュクゼン。

今までの神社に曾て見たことの無い明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來て、遠く神域の中を望み見た刹那、第一に此の事を直感した。そして一歩一歩、美しい小砂利の上を、神殿に近く蹈入るに隨つて、愈〻肅然たる心持になつて、深く襟を搔合はせた。



第一鳥居

參道の兩側には盡きることを知らない密林が何處までも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。

清冽　セイレツ。

萬成　花崗石の名産地。

勾欄　コウラン。

錦繡の影

樹齢

鳥居から約一町ばかり奥へ入つて神橋の處へ來ると、何處からともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山市萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を模した風致の好い小流で、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が錦繡の影を水面に落して、美しい秋の景色を添へてゐる。此處は神苑の中で唯一の人工を加へた處で、神苑の殆ど總てが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。

神橋を渡ると、兩側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木が斷えた處に、千七百四十年の樹齢を重ねたとい

明神鳥居　柱は圓く笠木・島木はそりを持ち、額束・くさびあり。
幅員　フクヰン。
亭々　高く直くのびたちたるさま。
土佐繪　平安朝時代に起りし畫風。

はれる直立六丈餘の臺灣產檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、高さは三丈九尺に達するとのことだ。

此の鳥居の在る處は、南方原宿方面からする幅員八間の南參道と、北方千駄が谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、此處から左折すれば道は更に十間の幅員に擴大されて西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合はせて、其の總坪

樓門　ロウモン。二階作りの門。
木曾　長野縣西筑摩郡木曾川の上流。
衆庶
默禱　モクタウ。

數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林產の檜材を以て造られてある。近く拜殿にのぼつて拜すると芳ばしい檜の香氣が强く鼻をうつて、如何にも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して、奥は卽ち神靈のおはしますの內々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖の場所である。

私は默禱を終へて、始めて向うを見上げた。

まあ、何といふ明るい快い感じを持つた社殿であらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な併し陰鬱な感じを漂はせて居る中に、此の神宮ばかりは、隱す所の無い心持で、十分な光線に總てを解放し、

ふさはしい

闊達　クワツタツ。心ひろくしてこせつかぬこと。

總てを露出して見せてゐる。而も、それでゐて決して淺薄な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうのない莊嚴な感じが滲透して來て自然と頭のさがるやうな強い威力が迫り來るのを覺える。

いかにも明治天皇の神靈を奉祀するにふさはしい神宮である。

久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く觸接し、國民と親しく協力して、新文明を吸收しようと御勉め遊ばされた明治天皇の、活動的・進取的の闊達な御氣象に對して、如何にもその明るいお宮の感じが、ぴつたりと呼吸を合はせてゐるやうに思はれる。

均齊を保つ

廻廊　クワイラウ。

便殿　ベンデン。休息のために設けたる御殿。

たとしへ。

視野　目に見ゆる範圍。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そして其の奥に續いて便殿の遠く望まれる心持、それらの總てが、又たとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

南　神　門

拜殿を下りて、西神門から出ると、約一町に亙る森林帶があつて、その向う、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に綠の色を展べてゐる。

嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉が、其處に見られる。

こゝらへ來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶びて來て、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉樹の交つてゐるのが少からず目につく。寶物殿へ行くまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。寶物殿は、形式を中古時代に取つて、其の材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡製鐵所製の鐵材は、約十二萬貫に及んだといはれてゐる。

八幡製鐵所　福岡縣八幡市にありし國立の製鐵所。今日では官民合同して日本製鐵株式會社といふ。

後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を廻つてわかゝしい楓の樹が美しく植ゑつらねてある。

池塘　チタウ。いけのつゝみ。

植ゑる

私は此の寶物殿まで來ると、再びもと來た道を、表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり左右兩側にある古雅な木柵を廻らした一構は、卽ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑內の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、何れも極めて御質素のものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝのもので、殊

舊御茶屋　隔雲亭といふ。

寶物殿

野趣

更技巧を弄しない處に何ともいへぬ優雅な趣を帶びてゐる。此の御苑は、祭神二柱の御在世中殊に御愛賞遊ばされた處で、大空高く聳えてゐる松を背景にした芝生のあちこちに、美しく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生茂つた小丘の上に連なり續いてゐる櫟や楢の雜木林にも、東京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。

私はこれらを一わたり拜見して廻つて、涙ぐましい程の強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。

振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりまう深い靄に包まれて、晝でも暗いほど黑々と生茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切開いたやうに、路線の白い色の暮殘つて續いて見えるのが、何となく嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、其の神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄附けられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な、幽邃な、優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果して此の深い印象を忘れる日があるであらうか。

（溝口白羊―明治神宮紀）

溝口白羊　名は駒造。文學者。大阪府の人。明治十四年生。

神域

明治天皇御製

いにしへの姿のまゝにあらためぬ神のやしろぞ
たふとかりける

十一月
明治三十七年。

白井中佐
名は二郎。第三軍參謀。

齋藤中佐
名は季次郎。第三軍參謀。

乃木少尉
名は保典。乃木希典の第二子。

二　乃木將軍

十一月二十八日の夜であつた。

第三軍參謀部の電話のベルがけたゝましく鳴つた。

「何か？」

と、受話器を耳にあてながら言つたのが白井中佐。

「俺は白井ぢや。君は齋藤か。」

「ふむ、また失敗か。何！乃木少尉が戰死した！戰死したか？どうして――傳令中に？さあ、それを將軍に言はんといふわけには行くまいが、よし〳〵何とかするよ。うむ、うむ、まう一度夜襲するて。よし、弔ひ合戰をやつてくれ。さ

呆然

よなら。」

かういつて電話は切れた。

乃木大將夫妻

白井中佐は、受話器を手から離しもしないで、呆然としてゐた。眞黑なものが目の前に突つ立つたやうになつた。窓の外にはひゆうひゆうと寒い風が闇の中を吹いてゐた。

時計を見るとまう九時に近かつた。中佐はどうしようかと考へた。しかし、第一、戰況を報告しなければならないので、思ひ切つて乃木大將の部屋へはひつて行つた。

躊躇（チウチヨ。）

部屋の中は眞暗であつた。大將はまう休まれたのかと思つて一寸躊躇した。しかし大將が火もつけないで部屋に居られることは、いつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。休んでででも居られるのかなと思つた。すると暗い中から「誰かい。」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか。何か用か。」

「戰況を申上げに……。」

かういふと、ぱつと燐寸が光つた。大將の顔が蒼白く光つた。大將は蠟燭に火をうつした。蠟燭のしんがじいじいと音を立てた。

二百三高地　旅順要塞背面の重要地點たる小丘。海拔二〇三米。

「戰況といふと？」

「二百三高地でございます。」

「うむ、どうだつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたといつて來ました。」

「さうか。――死傷はどのくらゐあつたな。」

「はゝ、まだはつきりわからぬと思ひますが、すぐ調べまして。」

蠟燭の灯に照らされた大將の蒼い顏を見ると、それ以上のことは中佐の口からは漏らしかねた。大將はぢつと灯を見つめたまゝ、何ともいはないでゐた。中佐は大將の顏を打まもつてゐると、涙がこみ上げて來た。そして手足がぶる〳〵と震へた。

「死傷者をよく調べて下さい。」

大將が思ひ出したやうに、かういつた。

「はい。」

「まうそれだけかい。」

「それに、閣下、御令息が戰死されました。」

中佐の口から我ともなしに吐出された言葉であつた。

何だか大將から引出されたやうに。

「何！保典が？さうか。」

かういふと、大將はふいと蠟燭の火を消してしまつた。

そして體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐はぢつとそこを見つめた。しかしまう何の音もし

アンペラ　敷物などに用ふる下等なるむしろ。

なかつた。中佐は足を忍ばして外へ出た。

ごう〳〵といふ風の音が、窓の外を通り過ぎた。

保典少尉は、友安旅團長の副官であつた。三十日の午後八時頃、旅團長が殘れる二中隊を提げて突擊するに決し、その命令を乃木副官に傳達させた。乃木副官は承つて塹壕內を前進中、額に銃彈を受けて卽死したのである。

この報を電話で話したのが、軍の參謀——第一線の狀況視察のため二百三高地に出てゐた齋藤中佐であり、これを聞いたのが白井參謀であつた。

軍の高級副官吉岡中佐が、乃木少尉戰死の報を聞いたのは、白井中佐より少し後れてであつた。吉岡中佐は津野田

友安旅團長　名は治延。後中將に進む。大正二年歿。

吉岡中佐　名は友愛。明治三十八年奉天に戰死す。歿後步兵大佐に進む。

津野田參謀　名は是重。後陸軍少將に進む。昭和五年歿。

参謀にどうしたらいゝだらう、將軍に話したものだらうかといつて、當惑してゐたが、結局津野田參謀が話すことになり、乃木將軍の部屋に入ると、將軍はまた蠟燭に火をつけた。

津野田參謀が恐る〳〵乃木少尉戰死のことを報告すると、この時は、

「そのことなら知つてをる。好く戰死してくれました。これで世間へ申譯が立つ。」といつた。そして又火を消して、ころりと横に寢轉んでしまつた。

津野田參謀は手持無沙汰に部屋を出て、吉岡中佐と二人して聲をあげて泣いた。

保典少尉は、師團の傳令將校として比較的安全の職に置

手持無沙汰

かうといふことになつてゐた。師團でも勝典中尉戰死のこともあり、いくらか保典少尉に目をかけてゐたのであつたらう。

こんな話を少尉が耳にしたので、早速少尉は、父大將へ手紙を書いた。

一、先日私自分にて荷分け致せし外、母上様より御送附相成候マント、此の者に御渡し有之度願上げ候。

二、又自動拳銃を第一聯隊の故兄上様中隊へ送附の儀に

マント　外套。

乃木保典少尉（右）勝典中尉（左）

付きて、私自身にて參り兼ね候に付き、何卒父上様の御添書を頂戴仕り度く願上げ候。

三、先日御話有之候私師團司令部へ參るとの話、歸營致し、考へ候所、現今名譽多き野戰隊小隊長より、殆ど非戰鬪員に等しき職に轉ずる事に候間、直接敵に接して兄上様の仇を報いん事も爲し得ず、且は何の特別の技能をも有せざる私が、選拔を受くるの理由なきに、比較的安樂なる位置に赴くは、他同期生に對し心苦しく、他にその適任者、例へば外國語をよくする者多きに對し、甚だ面白からず考へられ候故、或は此の御話の儀、御變更相成らざるや一寸御伺ひ申上げ候、尤も御命令なれば致方も無之候へ共、

せめて旅順陷落まで如何にか相成らざるものにや、御伺ひ申上げ候。先は要事迄。

草々可祝

二十二日　　保典

父上　座下

保典少尉が兄の仇を打ちたいといふ念願、それを讀んで大將は非常に喜んだ。そして師團司令部へは取らぬやうにしてくれと師團長へいつてやつた。それで友安少將の副官になつたのであつたが、二百三高地で最期を遂ぐるに到つた。

兄の仇を取りたいから第一線へ出して貰ひたい、特別の技能のない者を師團へ取るといふのは、友人に對しても情

實があるやうで心苦しいといふ保典少尉の態度は、實に立派である。ことに父將軍に對する親みの情が紙外に溢れてゐるのを見て、そゞろに涙を催さしめる。

乃木大將が兩兒を失つての後の心の淋しさはどんなであつたらう。この手紙を見ても父子の睦まじさがよくわかる。勝典が死んでも、保典が死んでも、たゞさうかと多くをいはれなかつたが、心臓は張裂けるやうな思であつたらう。

この父にしてこの子ありといふことは、實に乃木大將父子の如きをいふのであらう。

（櫻井忠溫―將軍乃木）

櫻井忠溫　陸軍少將。愛媛縣の人。明治十二年生。

三　文章道

十七八歳の頃、私はよく隅田川で泳いだことがある。全く水には經驗の無かつた私も、漸く岸を離れることが出來るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通つてゐるうちに、對岸まで泳ぎ著くことが出來た。更に又一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた、水瀬の速い遲いも分つて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと溫かいとも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を、泳ぎながらに見ることも出來た。板子

隅田川　東京市中を貫流する河にして荒川の下流。普通千住大橋より下をいふ。

潮流　テウリウ。

浮きつ沈みつ

浮身

小諸　コモロ。長野縣北佐久郡淺間山の西南にある町。

無しには溺れる外は無かつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことは、なか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人を見たりした時は、全く感嘆してしまつた。文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難く無いに相違無い。

信州の小諸に居た頃、私は弓を稽古したことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心

假令　タトヒ。
一手　ヒトテ。矢二本。

掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴むところも無く、矢の曲直を辨別する力も無く、さうして幸に當つた矢は、高慢な煩はしい熟練を思はせるばかりだ。

射弓

小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得の有る老人が、私達の矢場へ來た。その老人が、先づ姿勢を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一

焦心

手揃ひで同じ場所に行くやうになつた。これは文章の道にも當篏めて見ることが出來る。唯好い文章をばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ自己から正してかゝらねばならない。

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書のかたはら、よくその鍬を擔いで行つて土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘起すことから始めた。土を碎いた。小石を擇りわけた。地ならしをした。汗を流してそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ易いものから作つて見た。その畠には大根・白

サク　土をあげて根にかくること。

嚴肅

菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけに行つた。馬鈴薯の花の白くさかりな頃に行つて、試みに土の中を探つて見ると、はや圓いのが幾つも幾つも根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。畠の中には嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の農夫の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて、非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でも能く思ひ出

すことが出來る。我々が文章の手本とすべきものは、何程我々の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方が無い。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。試みるといふことは、悟るといふことの初めである。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初のうちは、無暗に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少くて、身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押すことが出來る

新片町　東京市淺草區。
淺草橋　神田川に架す。
兩國橋　隅田川に架す。
櫓　ロ。

やうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうにと、さう思つて漕いで行く樂みなども、それから起つて來た。その後、船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある。簡素の美がある。文章の道にも無暗に筆を弄することが、決して自己の眞の表白とは成らない。

眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。

（島崎藤村―飯倉だより）

秋涼し手毎にむけや瓜茄子　芭蕉

傳馬　テンマ。傳馬船のこと。さう

鎖すとには

花園神社　東京市四谷區三光町にあり。

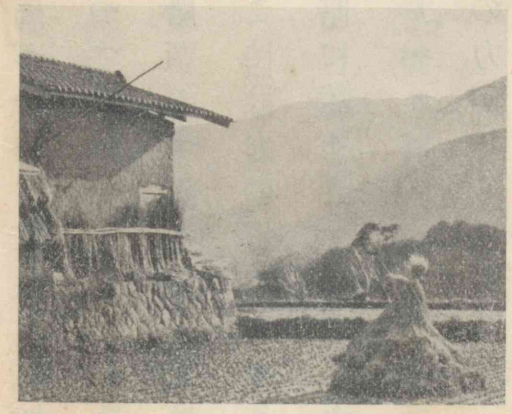
百日紅　サルスベリ。千屈菜科の落葉喬木。

簇生　むらがり生ふること。

環堵蕭然　クワントセウゼン。

四　田園雜興

みづから世を避けて門を鎖すとにはあらねど、片田舎に住めば、來り訪ふもの自ら稀なり。東京の西郊、花園神社の傍、市街を離れて一宇の茅屋建てり。屋外凡そ千坪、前に葡萄棚あり、後に竹林あり。梅や、櫻や、柿や、栗や、松や、檜や、椿や、楓や、無花果や、百日紅や、その間に簇生す。四顧たゞ木立を見て人家を見ず。環堵蕭然、何となく我が心に適する處なり。



田園

都門

志業　めざす事業。

緒に就かず　なりぬること。恥づかしけれ。

われ年來病軀を抱けり。我が志を伸ばさんには、まづ我が體の健康を復せざるべからず。西郊の地、空氣新鮮にして、街上の塵埃到り及ばず。啻に我が心に適するのみならず、また我が體に適するを以て、居を此處に定めぬ。都門より歸り來れば、滿園の綠樹笑つて我を迎ふ。稚兒飛來りて我が手の風呂敷包に取縋る。例として土産の菓子のあらんことを期するなり。さるにても、我が志業未だ緒に就かざるに、早くも三人の子の父となりぬるこそ恥づかしけれ。

蒸暑き夏の夕べ、涼み臺を無花果樹下に移して、一家晩餐に團欒すれば、竹葉戰ぎて涼氣自ら盤上に逝る。一鉢の飯、母と分ち、妻子と分ち、庭の雞と分ち、池の鯉と分つ。いま一

つ、一匹の犬、常に食時をたがへず來りてかしこまる。これ近隣の家に飼へるものなり。その主人、近頃、妻子を殘して病死せり。喪家の狗の譬、思ひ出されてあはれなるまゝに、殘肴を投與ふるを常とすれど、貧家の廚、魚なきこと多し。馬鈴薯など與ふるに、たゞ鼻先にて嗅ぎたるのみにて、悄然として立去るこそ氣の毒なれ。

喪家の狗　新に死人ありし家の犬。孔子家語に、「纍然として喪家の狗の若し。」とあるによる。

立去るこそ氣の毒なれ。

一泓　イチワウ。

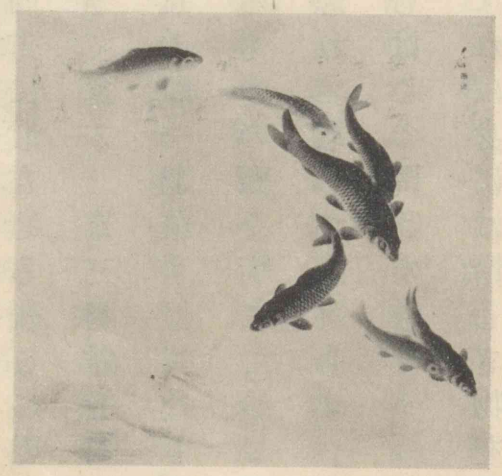
蠑螈　有尾類の兩棲動物。

一泓の池水、二間四方に足らざるばかりなれど、清水涌出でて、流れて田に注ぐ。もとは朽木、中に滿ちて、蛙や蠑螈の棲處となり、岸には雜草おひ茂りて見るかげもなかりしが、草を刈り、朽木を取りのけ、蠑螈を捕へ出すこと七八十に及び、水始めて澄みて鏡の如くなりぬ。池邊に立ちて眺むるに、蛙・蠑螈のみと思ひの外、長さ一尺ばかりの鯉魚ありて泳ぎ廻り、人の足音聞きては穴深く潛みゆく。大兒と中兒とこれを見て興がり、今少し鯉を入れよと言ふまゝに、十尾入れ、二十尾入れ、三十尾入れ、終に大小七八十の多きに及べり。白や、緋や、黑や、碧水に一種の模樣を描き、或は集り、或は散じ、時には水面に喰喁し、時には空に躍る。かたばかりの欄干ある獨木橋の上に立ちて、これを眺め、これに餌をやること、三兒にとりてはこの上もなき慰み

言ふまゝに

喰喁　ケンギヨウ。魚の口を水上にあらはし呼吸をなすこと。

獨木橋



群鯉　水上泰生筆

なり。

覺束なげに「とゝとゝ」と呼びて、雞に餌を與ふることも亦小兒が慰みの一つなり。家の四方に散在せる雞、この聲を聞きて喜んで來り集り、先を爭うて食ふ。雄三羽、雌七羽あり。種類も一ならず。就中鬪雞の雌一羽、最も慓悍なり。餌を貪ること最も甚しく、近寄るものの頭を嘴にてつゝくさま、如何にも憎氣にて、他の雞恐れて敢へて近寄らず。されど最も大にして好き卵を産むは、この鬪雞なり。

我平生、物累ひなきことを期すれば、身には惜しき物を帶びず、家にも惜しき物を置かず。身邊の物品、總て用を便ずるを以て足れりとす。一室の中、粗末なる机と書物との外

爭うて
爭ひて
鬪雞

慓悍
ヘウカン。すばやくしてたけきこと。

には、又他の物なし。雞、遠慮なくも座に上り來り、机上に立ちて鳴くことあり。護謨靴はきて庭に遊べる小兒、いつの間にやら靴のまゝ上り來ることもあり。されど、雞上らば追ふべきものと心得て、おのれは靴のまゝ上り居りながら、兩手をひろげて雞を追出すもいとあどけなし。末の兒はまだろくに口も利かれぬばかりの年頃なり。母の乳に飽けば、をり〳〵我が机邊に來る。我坐すれば兒も坐し、我横になれば兒も横になり、我書を開けば兒も書を開き、我筆を執れば兒も筆を執る。あまりにおとなしきに、不圖心づきて見れば、折角我が書きたる原稿を塗抹せることあり。

夕闇の端居に、裏の田より竹林を越して、二つ三つの螢飛

あどけなし

塗抹
トマツ。

蜀を望む　貪りて足ることを知らざる意。

來るを見て、あれ捕へよと兒の請ふまゝに、これを捕ふれば、蜀を望むのならはし、田に行きて多く捕へてよと請ふ。田に行けば螢多し。忽ちの間に數十匹捕へつ。俄か作りの螢籠に入れて打興じたる兒等も、やがて蚊帳の中に入り、枕邊の螢光いよ〳〵涼し。

園中、兒を喜ばしむるものは梅の實なり、葡萄なり、柿なり、栗なり、無花果なり、筍なり、雞なり、鯉なり、蜻蛉なり。是等に對して兒は喜ぶ。喜ぶ兒を見れば唯嬉しきなり。慾もなし、名利の念もなし。沈思して自然に對すれば、初めはその愛すべきを覺え、終にその敬すべきを覺ゆ。自然の奥には何等かの神異の潜めるが如く思はる。而して小兒は人類

子を持つて云々　俚諺に、「子を持つて知る親の恩。」とあるによる。

べくや

古稀　コキ。七十歳のことをいふ。

苦楚　クソ。

小春日和

。。。こそ……詠じけめ。

親を思ふ云々　吉田松陰の歌に、「親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ。」とあるによる。

の中にて最も自然に近きものなり。よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも、物のあはれは自ら知らるべくや。

樂しき我が團欒にも、なほ一點の愁雲たなびく。そは我が胃腸の病なり。母や、齡古稀に近し。憂愁苦楚の中に數十年を送りて、我と相住むことも前後僅かに十餘年に過ぎず。末年、我と相住みて小康を得たるは、なほ一年中の小春日和の如きか。然るに、我が病弱の身は、その小春日和をさへ時雨の空に變ぜしめんとす。母は常に我が病身なるを氣遣ひ、我が食少きを心配す。されば「親を思ふ心にまさる親心。」と詠じけめ。世に、子の病ばかり親の心を痛ましむるものなし。罪深きかな。抑不孝の子なるかな。昔は

廉頗　レンパ。支那趙の名將。
強ひて　健啖　ケンタン。大食の意。
大町桂月　名は芳衞。文章家。東京帝國大學出身。高知縣の人。大正十四年歿。年五十七。

廉頗老いてなほ用ひられんとして、強ひて健啖せりとかや。それは功名故、我は親故に強ひて餐を加へ、久しく絶ち居りし晝食さへものするに到りぬ。食進むやうになりて、嬉しとて、母の喜ぶさまを見るにつけても、覺えず涙ぐまれしこと幾度ぞや。

（大町桂月―桂月全集）

人の親のこゝろは闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

（藤原兼輔）

父のみの父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり

（楫取魚彦）

植ゑたる
いわけなき兒　幼き子。
たのめて　たのみにして。

五　隨感二題

一　朝顔

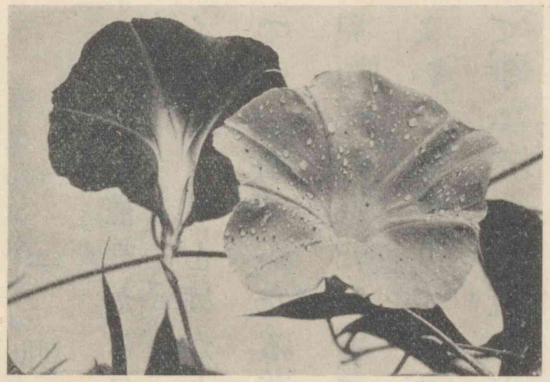
朝顔を植ゑたる日より、芽ざすを待つは、子を育つる親の心もかくやとばかり思ひ知らる。二葉よりいや葉生ひ出で、いと細やかなる蔓の、垣ほに取りつくさまは、いわけなき兒の、ものをたのめて立ちそむるに似たり。蔓稍肥え葉いよいよしげりて、此の蔓彼の蔓に添ひ、彼の蔓此の蔓を卷きて、爭ふが如く競ふが如きは、路に惑へるものを案内するさまなど、繪にも巧めるものをや。あるは登らむとするものの手をとりて引上ぐるさまなど、繪にも巧めるものをや。

おのがじしめいく。

起きあへず

まだきに早くから。

花は其の日其の日に色かへて、おのがじしに染めなして、夙に起くるを勸むるに異ならず。しのゝめの今日明け行くほど、露を含みたるが、そよ吹く風にもまれて、おもげに起きあへず、ふりこぼせば、こなたの花の、その露をうけて、しづくも漏らさざる、すべて君臣相いつくしみ、父子相あはれみ、夫婦相むつび、兄弟相扶け、朋友相親しむにひとし。



朝顔

人の世に在るも、この花の如く、其の日其の日を營みなば、盛りもいとながく久しからむと、まだきに起出で東雲の曙

柳澤淇園　名は里恭。大和の國（奈良縣）郡山藩の家老。寶曆八年歿。年五十三。（一三六六—一四一八）

雲萍雜志　四卷。柳澤淇園の隨筆。

成就　ジャウジュ。

志ある者は云々　光武帝の言。後漢書に出づ。

をなぐさみ侍りぬ。

（柳澤淇園—雲萍雜志）

二　立志

學問は先づ志を立つるを以て本とす。志とは心のゆく所なり。道を知り行ひて君子に至らむと思ふ心、常におこたりなく、念々やまざるを志を立つるといふ。志たゝざれば學ぶ事成就せず。故に古人も「志ある者はその事つひに成る。」といひ、又「志立つは學の半ばなり。」といへり。たとへば弓射る者の的に志し、道ゆく者の宿りに志すが如し。よろづの事先づ本をつとむべし。志を立つるは學問の本なり。志を立つる事は大にして高くすべし。小にして低けれ

小成に安んず

世俗

謙德

貝原益軒
名は篤信。筑前（福岡縣）の人。正德四年歿。年八十五。（一二二九〇—一二三七四）
大和俗訓
貝原益軒の通俗教訓書。

ば、小成に安んじて成就し難し。天下第一等の人とならむと平生志すべし。世俗と同じく、賤しく低くすべからず。

かく志を立てて、日に月に努め行はば、久しくしてその功積りて、必ず人に優るべし。上を學べば中に至り、中を學べば下に至る、下を學べば功をなさず。

貝原益軒の墓

又心は心にして低くすべし。心大なれば、驕りて慎みなく、高ければ、人にたかぶりて謙德を失ふ。

（貝原益軒—大和俗訓）

落葉松
松柏科に屬する落葉喬木。

佐久の平
長野縣南北佐久郡に亙れる平地。

ちくま
千曲川。源を山梨・長野の縣境、金峰山の北麓に發し佐久平を貫流し犀川と合して信濃川となる。

六　林の道

落葉松の林の道にひとりなりこのたか原のあしたを愛す

裾野路は下りになりて汽車はやし朝かぜにゆらぐ月見草の花

佐久の平ちくま岸田のみづきよみわか苗の間を鯉あそぶなり

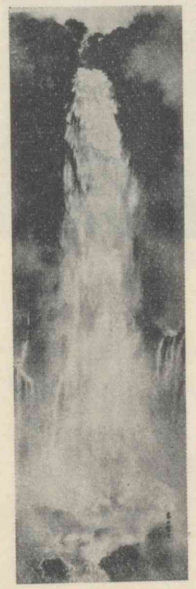
自轉車おり片手額の汗ふきくうめの木ゆさぶる此のいたづら兒

朴
ホホ。もくれん科に屬する落葉喬木。

とち
とちのき科に屬する落葉喬木。

海の音さそひもてくる眞晝かぜとみにつよくして
嵐だちたり

瀧風のあふりの風にゆさゆさと大きうゆらぐ朴の
葉とちの葉



巖華
山元春汀筆

道をれて瀧みえずなれりさらさらと足ふむごとに
崩え落つる土

朝山は松風はやし吹きくだる風の下びのにはとり
の聲

（佐佐木信綱）

伊勢松坂
三重縣松阪市。

老舗
シニセ。數代繼續しきたりし商店。

得意

岡部先生
賀茂眞淵。

七　松坂の一夜

時は夏の半ば、「いやとこせ」と長閑やかに唄ひ連れゆくお伊勢參りの群も、春先ほどには騷がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本を商ふ老舗文海堂柏屋兵助の店先に、「御免。」といつて腰をかけたのは、魚町の小兒科醫で年の若い本居舜庵であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名を宣長といつて、皇國學の書やら、漢籍やらを常に買ふこの店の得意であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を拍つて、

「あゝ殘念なことをしなされた。あなたがよく名前を云つておいでになつた江戸の岡部先生が、若いお弟子と供を

連れて先ほどお立寄りになつたに。」

といふ。舜庵は、いつものゆつくりした調子とは違つて、

「先生がどうして此處へ。」

と、あわたゞしく問ふ。

主人は、

「何でも、田安様の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸途に參宮をなさらうといふので、一昨日新上屋へお著きになつた所、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はまうお宜しいとの事で、御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお

書肆文海堂の額

田安様　田安宗武。徳川吉宗の第二子。眞淵に從ひ學ぶ。明和八年歿。年五十七。（一七一三―一七七五）

浮腫　ムクミ。

休みになつて、參宮にお出かけになりました。」

舜庵、「それは殘念なことである。どうかしてお目に懸りたいが。」

「迹を追うてお出でなさいませ。追附けませう。」

と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聽取つて店を出た。

迹を追うて松坂の町を離れ、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうしてもそれらしい人に追附き得なかつたので、すご〳〵とわが家に歸つて來た。

數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂なる新上屋に宿

追うて　追ひて

垣鼻村　今、松阪市に屬す。

二見が浦　三重縣度會郡二見村の海岸。

鳥羽　三重縣志摩郡にある町。日和見山は町の西北にある小丘。今は日和山といふ。

村田春郷　眞淵の門人。歌人。江戸の人。明和五年歿。年三十。（一三九九―一四二八）
村田春海　春郷の弟。眞淵の門人。國學者。文化八年歿。年六十六。（一四〇六―一四七一）
冠辭考　十卷。冠辭を集めて、五十音順に配列註釋せしもの。
萬葉考　六卷。萬葉集の註釋書。
有德公　德川吉宗。
嘖々　サクサク。口々にいひはやすさま。

つた。

「若し歸途に又泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい。」

と賴んで置いた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るものも取敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛りで、早くも別室にくつろいでゐた。衞士は仄暗い行燈の下に舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は、當年六十七歳、その大著なる冠辭考・萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、その名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれども頗ゆたかな此の老學者に相

契沖　眞言宗の僧。大阪に住す。國學者。元祿十四年歿。年六十二。（一三〇〇―一三六一）
ゆくりなし
古事記　三卷。神代より推古天皇の朝までの事を記す。元明天皇の朝に太安麻呂の記したるもの。

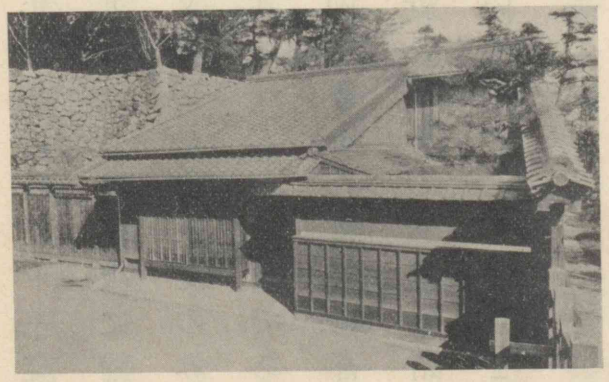
對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に逝つてをる才氣を溫和な性格に包んでゐる三十四歳の壯年、而も彼は二十三歳の時、京都に遊學して醫學を學び、二十八歳にして松坂に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。

「我も固より神典を解き明らめんの志があつたが、それには先づ漢意を淸く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。

萬葉　萬葉集。

古の意を得んには、古の詞を得た上でなければならぬ。古の詞を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡はいくばくも無く、神典を說くまでに至ることを得ない。御身は年盛りで、ゆく先が長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。併し世の學に志す者は、とかく低い處を經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出來



本居宣長の舊宅

心にしむ

潛戸　クグリド。

律儀者　リチギモノ。實直なる人。

夜なべ　夜間の仕事。

村田傳藏　眞淵の門人。坂大學の通稱。

ぬのである。此の旨を忘れず、心にしめて、まづ低い處をよく固めておいて、さて高い處に登るがよい。」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆閉され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道の何處を蹈むとも覺えず、魚町の東側なるわが家の潛戸をはひつた。隣家なる桶利の主人は律儀者で、いつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとんとんと桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

舜庵は、その後江戸に便りを求め、その翌年の正月、村田傳

うけひごと　誓約の詞。
縣居　アガタヰ。眞淵の家の號。
寶暦十三年　後櫻町天皇の御代。（一四二三）

藏が中にはひつて、名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。　爾來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答へた。　門人とは云へ、その相會うたことは僅かに一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百七十餘年前、寶暦十三年五月二十五日の夜、伊勢の國松坂日野町なる新上屋の行燈は、その光の下に語つた老學者と若人とを照らした。　しかもその仄暗い燈火は、我が國學史の上に不滅の光を放つてゐるのである。

寶永二年　東山天皇の御代。（一三六五）
享保十三年　中御門天皇の御代。（一三八八）
元文五年　櫻町天皇の御代。（一四〇〇）
明和五年　後櫻町天皇の御代。（一四二八）
榮える。
手代　テダイ。
大傳馬町　東京市日本橋區にあり。

八　本居宣長の母

本居宣長の母勝子は、寶永二年四月十四日、伊勢の國松坂新町の村田孫兵衛豐商の四女として生れ、享保十三年、二十四歲で小津三四右衛門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。　その長男が宣長である。　元文五年、三十六歲の時に夫におくれ、明和五年正月朔日、六十四歲で世を去つた。

小津家は松坂の舊家で、江戸に出て木綿問屋を營んでゐた。　宣長の曾祖父・祖父の時代には、相次いで大いに榮えたが、父三四右衛門の代に至つて、手代のために誤られて資產を失ひ、三四右衛門は四十六歲の閏七月に、江戸大傳馬町の

全うす
全くす
茫然自失　バウゼンジシツ。
狼狽　ラウバイ。

店で歿した。

三四右衛門の死は、いふまでもなく、小津家卽ち本居家にとつては大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた數年の後に世を去つた。かうしてその家に遺産として殘つたものは、四百兩ばかりの金子があるだけであつたが、それも親戚に保管されて、纔かにその利子をつかふことが出來るだけであつた。この間にあつて、勝子は一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。もし尋常の婦人ならば、茫然自失すべき窮境であつたのである。しかるに、勝子は些かの狼狽もせず、細心な思慮と明敏な判斷とを以て、雄々しくも

先見
未曾有　ミゾウ。
寄與　キヨ。社會國家などに利益幸福をよせ與へること。

一家の經營に當つた。

こゝに特に勝子の大いなる先見と稱すべきは、その宣長に對する明察と、事宜を得たその教育の態度とである。この事があつて、始めて宣長をして宣長とならせたもので、勝子の賢明は、よく本居一家を危急の間に全うするを得させたばかりでなく、更にまた本居宣長といふ一大學者を生ぜさせて、日本の國家及び日本の學界に、未曾有の寄與をなさせたのである。賢母の功績もまた偉大であるといふべきである。

何を勝子の先見といふか。それは、彼女が、宣長は到底商人となるべき性格ではないといふことを見拔いて、彼をし

て學者とならせ、以てその天分を成させようとし、しかも純然たる學者の生活の困難なことを知つて、生活の基を得るために、醫師とならせようとしたことである。よくその子を見拔いたとともに、また生計の點にも十分に心を用ひた勝子の明察と、思慮を盡したその教育の態度とは、眞に常人の及びがたいことではないか。

寶曆二年、宣長が二十三歳の春、勝子は宣長を京都に留學させた。宣長は京都に上つて、まづ堀景山に就いて儒學を學び、後に武川幸順に就いて醫を學んだ。その間實に五年四箇月ほどであつた。この五年餘の留學が、やがて宣長の學問の上にも、また生活のためにも基礎となつて、宣長をし

寶曆二年　桃園天皇の御代。（二四一二）

堀景山　名は正超。儒者。安藝侯の臣。寶曆七年（二四一七）歿。

武川幸順　南山と號す。醫師。京都の人。安永九年歿。年五十六。（二三八五—二四四〇）

て後年の宣長とならせたことは、宣長の傳に於ける明白な事實である。この五年間餘、宣長をして何等後顧の憂ひがなく、また都會生活にありがちな多くの誘惑にも陷らずに、十分勉强することを得させたことは、全く勝子の苦心と激勵との結果であつた。

さうでなくてさへ困苦の中から、宣長を留學させて、一家の經濟を立て、また學費を支辨して行く勝子の苦心は、決して一通りではなかつた。勝子は、或は家財を賣り、或は親戚から借錢をなし、苦心慘澹してこれを處理した。しかも彼女はその子に對して、例へば、會ひたい情をも忍んで歸鄉を延ばさせようとしたやうに、もとより節約を要求こそはし

後顧の憂ひ

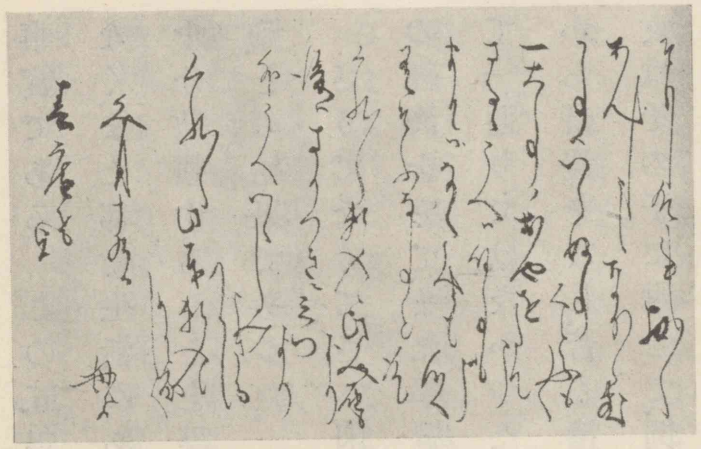
苦心慘澹　クシンサンタン。

愚痴
ゲチ。

そもし殿事扨〳〵あんし申候なか〳〵敷事はいらぬ事くとふも〳〵一大事候おやをたて申さるゝうへは何事も申まてはなく候へとも心へ有そふな事と存候くれ〳〵頼入候此文屆候より後はさかつきに三つより外うへつゝしみ申さるへく候くれ〳〵此義頼入候
めて度かしく
母より
文月十九日
春庵老　參る

家運挽回
カウンバンクワイ。

たれ、必要の費用に對しては、常に事を缺かさずこれを送つて、決して愚痴がましいことをいはなかつた。併し、自分の苦心は或程度まで打明けて我が子を誡めた。さうして、宣長の日常生活につき、また勉學については、絶えず激勵し、その上宣長の雙肩にかかつてゐる家運挽回の大責任についても、自覺させることを忘れなかつた。或は飲酒を戒め、或は食物に用心し、或は寢冷えに氣をつけるなどは、勿論一般の



宣長の母の書翰

氣質
カタギ。

啓發
ケイハツ。

妙諦
メウタイ。すぐれたまことの道。

そもじ
そなたといふ意に用ふる女詞。

母親氣質であらうが、我が子に對するその激勵と啓發との態度に至つては、眞に大なる教育の妙諦を得たものといはなければならぬ。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「扨々何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。隨分々々無事にて心強く思ひ、外の儀に心移し申さず、唯々一筋に醫者の方心掛け、申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く道々を專一に成さるべく候。此の所そもじ取り損ひ取りはづし申され候と、いつもいつも申す通り、一人の母此の世よりまよひ申し候。其の上、父母・先祖の跡の所よく〳〵心にしめ、專一に守り申さるべく候。人々そもじこと褒め居申し候へば、

敬重　ケイチョウ。
大文字

感應　カンオウ。

此所取り損ひ候へば、親の恥申す樣はなく候。大不孝と存じ候。」

とあるが如きは、この點に關して最も敬重すべき大文字である。

勝子が當時のかやうな思慮と苦心とは、もとより、俊秀の子である宣長に感應せずにはゐなかつたに相違ない。しかし、當時勝子から送つた書翰は數十通も殘つてゐるのに、宣長から對へたものは、遺憾ながら殆ど傳はつて居らぬ。隨つて、勝子の心盡しが、いかに宣長の心に反應したかは、これを知り得ないが、しかも、その反應の効果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは宣長の學者としての成功

素因　ソイン。

歎美　タンビ。

偲ぶ　シノぶ。

である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多くこれを勝子の人格に求むべきである。宣長の學問と事業とを歎美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。

いかなる時代にも、總べての方面に渉つて最も必要とするところのものは、大人物である。さうして大人物が世に出るためには、その國民の母が賢明でなければならぬ。吾人は今に於て、勝子を偲ぶ情が殊に切である。

正月朔日の書つかた母なる人の病いまし〳〵と
なり、給へる頃しも鶯の始めて鳴きければ　本居宣長
春來ぬときくにつけてもたらちねの立ちも歸らぬ別をぞ思ふ

九　淺間裾野の晩秋

秋も漸く更けて、冬の凋落がすぐ目先に見えるといふ感じは、東京を出て北に、武藏野の平野を過ぎ碓氷峠を越えてからの事である。

東京にゐて秋を語ることがをこがましいほどに、輕井澤から沓掛あたりにかけての秋の深さを、私は今沁々と感ずる。千が瀧の高原、誰かこゝに來て、その思ひがけない、自然が彩る秋色の美に、恍惚としない人があらうか。山また山といふべき土地の起伏。しかもその山が多く雜木林であるから、山を覆ふ木群の限りは黃に紅に染めて、猶それに常

凋落　テウラク。しぼみ落つること。

見える　碓氷峠　群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境にあり。海拔約一〇〇〇米。

をこがましい　輕井澤　長野縣北佐久郡にある町。碓氷峠の西麓。

千が瀧　沓掛附近にある別莊地。

噴煙（淺間山）

添うて
添ひて

色なき世界

淺間火山
長野縣・群馬縣の境にあり。那須火山系に屬す。海拔二五四二米。

せゐ。

かういふ

綠樹の綠が所々に添うてゐるのは、五彩とも七彩とも形容したい。土といふ土に隙間なく生えてゐる草の葉の續く限りは、茶色に黃色で、剩へ草紅葉の血汐の色も入りまじる。今こそ「色の世界である。」と思ふのである。

夏、この地に來てその淸冷を愛した心に、今日の色の世界を視覺におくと、彼の綠の天地は「色なき世界」であつたとさへ思はせられる。

肉づきのよい淺間火山、夏は雲が多いせゐか、山頂の煙を見ることが少い。よく避暑に來る友達が、

「淺間山つて、煙が出てゐませんね。」

かういふ位、私たちは煙を見たがつたものだが、秋になつ

てから空は高く澄んだ。一片の雲もない蒼空の彼方に、淺間山の煙は思切り太く天を貫くやうに立つてゐる。

「壯觀だな。」

私の滯在地を訪ねた人々はかういふ。

山頂から噴煙がむく〳〵として上つてゐる。間斷なく、休息がない。ころ〳〵と生れて上る煙が山を離れようとすると、先に出た煙は既に空のものとなつて流れてゐる。火熱から新しく生れたばかりの煙が、その色も濃厚に或は金色に或は黃色に勢ひづいて出てくる片端から、風に吹かれてずんずんと大空に擴がり靡いてしまふ。煙はかほどに複雜な色をもつて絕えず活動してゐる。淺間山は自分の吐く煙をかうして大空に燒きつけて、どこの山よりも存在を遠國にまで愈明かにするやうにも感じられる。そこに私達は、靜死した他の山に用ひない「壯觀」の語を以て呼ぶ理由があるのではあるまいか。

火山の印象を私は好む。私はこの淺間山を見、この煙を見る時、いつも天地の悠久を思ふ。時間を思ふ。時間のないことを思ふ。過去も、未來も、人間の規定に過ぎないのを

淺間山の遠望

噴煙

間斷なく

火熱

靡いて

悠久 イウキウ。

思ふ。淺間山はいつも今日だ。人が眠つてゐる間も休まないあの煙、人が死んでゆく日も詰ることのない、あの呼吸のやうな煙の吐きかた。この山の熱は冷えもしなければ老いもしないのである。淺間山はいつも「今日」である。

たゞ、時候に秋が來たのだ。見れば、夏の日の綠の著物は脫いだ。何の樹の紅葉であらうか、山腹から山裾にかけての黃紅の彩り、今こそ秋の著物に脫ぎ換へたのである。軈て冬が來るであらう。さうすると白妙の冷たい雪の著物を著せられるのである。私たち人間はそんなところまで想像する。それほどに私たちは感傷的なのである。

一望十里の外までも見えるやうな明るく冷たい高原に、

一望十里

ちら〳〵と玩具のやうに散在する山莊の悉くが戸を閉ぢた。草原を分けて行くと、ひつそり閑としてゐて、繁り茂つた八千草の原が、たゞ一色に冬枯れてゐるのにも、そこに淡い「亡び」の感に惹きよせられる。眼に見える色は複雜でありながら、活きて居る物がない。桔梗や撫子や萩や各〻競ふやうに咲誇つた花も、今はどれが桔梗だつたかと見分けもつかないで、同じ色の枯草になつてゐて、風が吹けばたゞがさがさと騷ぐばかり。

どうかすると、さうした枯草の中にも松蟲草の幾輪かの遲れ咲いてゐるのを見ることがある。晩秋に咲く花であるが、蕾を持つたからには、霜が降つても咲かねばならない

閉ぢた

八千草　ヤチグサ。あまたの草。

松蟲草　まつむしさう科に屬する多年生草本。

使命感

銀の穂

忘我の一刻

バウガのイツコク。

杉浦翠子

歌人。埼玉縣の人。明治二十四年生。

といふ使命感があるのであらう。まだ雪の來ない山麓の晴間に、早く咲いてしまひたいとばかり、急ぎの色に咲いてゐるのさへ私にはあはれが深い。

淺間颪がひよう〳〵と吹いて居る。水氣のすつかりかれきつた黄色な葉の、針のやうに尖つてゐる萱や芒は、不思議な風の音を作り出す。私は、枯葉を渡る風を聽きながら、眼に銀の穂の遠く山の根までもつゞいてゐるのを見ながら、忘我の一刻に入る。人間の聲がない。車の通る音がない。音がすると却つて驚くほどの靜けさだ。ぱつと脚下から飛立つ鳥に、私は屢〻驚かされるのである。

（杉浦翠子―朝の呼吸）

内藤鳴雪

名は素行。俳人。愛媛縣の人。大正十五年歿。年八十。

玉川

源を山梨縣に發し東京府及び神奈川縣を流れ下流は六郷川となり東京灣に注ぐ。

一〇　絲瓜の棚

内藤鳴雪

元日や一系の天子不二の山

矢車に朝風強き幟かな

大船の白帆干したり五月晴

玉川の一筋光る冬野かな

正岡子規

夕立にうたるゝ鯉のかしらかな

緣に干す蒲團の上の落葉かな

畫顔
旋花科。旋花屬の多年生草本。

絲瓜
ヘチマ。葫蘆科に屬する一年生の蔓草。

玄關に畫顔咲くや村役場
一群の鮎目を過ぎぬ水の色
むら雨の過ぎて鷄頭の夕日かな
枯れつくす絲瓜の棚のつらゝかな
行く年を母すこやかに我病めり

夏目漱石

菜の花の中の小家や桃一木
叩かれて晝の蚊を吐く木魚かな
凩や海に夕日を吹き落す
草山に馬放ちけり秋の空

新義州
平安北道にある都會。鴨綠江を隔てて滿洲國の安東に面す。朝鮮半島の北門を扼する交通の要點。

奉天
滿洲國奉天省の首都。

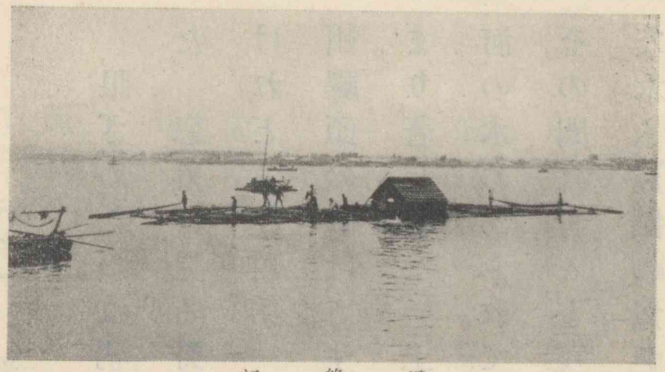
鴨綠江
源を白頭山の南斜面に發し、滿洲國と朝鮮との境界を流れ、西朝鮮灣に注ぐ。

一一　新義州より奉天まで

眼ざめたのは朝七時前、國境の都會新義州の手前であつた。窓外に見る野川の景色は、何となく荒れすさんで居たけれども、朝鮮第一の大河鴨綠江の下流にあるだけに、新義州驛頭の眺は、さすがに雄大である。投げやりのまゝの、あまり著しくない土地の起伏の、低い所は大抵水溜りである。河の水のあふれであらう。高い所には赤煉瓦の家がある。その間に青々と茂つたポプラやアカシヤの樣な荒い粗末な木も、周圍の景色に如何にもふさはしい。

間もなく鴨綠江の鐵橋を渡る。朝の川水は白く澄んで

見え、江上に浮ぶ船はざつと三百位、その間を船頭一人で漕いで居る渡船の様な船は、目立つて小さい。　對岸の安東は朝靄にかすんで、上流を見ると、川が二つに分れるあたりの洲の草原が、ぼうつと青んで居る。



鴨綠江

河を渡ればまう滿洲國である。　安東驛の便所には、白いペンキの札に「厠」と書いてある。　これだけでも旅人の感じを變へる力はある。　これからは時間が一時間前へ捻ぢもどされる。

此處で税關の檢査といふ煩しさがあるが、私は殆ど荷物を

安東
滿洲國南部の開港市。安奉線の終點。

持たぬので事もなくすんだ。

プラットフォームから見ると、驛の周圍には大きなどろやなぎの木が多い。　眼に入る建物は皆割合に立派だが、それは皆滿鐵の建てたものらしい。　靄の中から車の音が聞えて、藍色の支那人が元氣よく姿を現して來る。　それに次いで勞働者らしい白衣の朝鮮人の姿も見える。

間もなく汽車は出て安東支那町の側を通る。　瓦の細かい一種の趣ある支那風の屋根に交つて、アンペラの様な屋根やトタンの屋根も見える。　町を離れると小川がある。和かな梢を持つた水楊が、その間に點綴せられて居る。こ

滿鐵
南滿洲鐵道株式會社の略稱。

水楊
楊柳科に屬する落葉亞喬木。

荒漠

肥える

沙河
源を千山山脈に發し、滿洲平野を西流して遼陽附近を過ぎ、遼河に合す。

渾河
遼河の一大支流。滿洲平野の東南を灌漑し、牛莊附近に於て遼河に合す。

概念

れらの沿線どこでもこの水楊が多い。それは唯河邊ばかりでない。荒漠とした平野の處々に羊の様に點在して、この滿洲の景色をなごやかにして居る。滿洲へはひると、山にも野にも草が多い。朝鮮の様に土をむき出した處が少い。土の出た處は茶褐色を帶びて、朝鮮の赤土や白砂の色とは違ふ。明るさは少し減ずるが、何となく土地が肥えて居る様な感じがする。この土地は或は蒙古の曠野から吹飛ばされて來た砂土の堆積かも知れない。兎に角、奉天近くの沙河や渾河流域の平原へ出るまでの安奉線は、到る處山岳と溪流とに富んで、しかもその溪流が皆清澄であり、又樹木が存外に豐富であつて、我々が考へて居る滿洲の概念

臙脂色
エンジイロ。

みそ萩
千屈菜科に屬すを多年生草本。

草藤
荳科に屬する多年生草本。

月見草
柳葉菜科に屬する一二年生草本。

梅鉢草
虎耳草科に屬する多年生草本。

落莫
ラクバク。さびしき貌。

とは合はず、却つて日本の景色に似た所がある。その間に開かれた畑は、黍・玉蜀黍・高粱・稗・粟・陸稻・豆などであるが、それが初秋の空色と映じて、なかなか豐富な色彩を現して居る。高粱は赤褐色、粟は綠に黃を帶び、豆はまだ青く、その間に蕎麥畑の赤い莖と白い花、煙草畑の鮮綠、それから何といふ草か、處々に葉鷄頭の様な臙脂色をして、さうして筆の穗の様な形に見える草の畑、野には野菊の薄紫の色が殊に鮮かで、蓼の花の紅が美しく、女郎花・みそ萩・草藤・月見草、それから梅鉢草に似て大きい花などが咲亂れて居て、車窓の眺は決して落莫ではない。旅行をする時には、いつも植物の名を知らぬのがくやしい。名を覺えて居ないとつい顏も忘れて

しまふ。私の眼に止まるなじみの木は、ならがしは・アカシヤ・どろやなぎ・ポプラ・水楊位なものである。水楊の葉が風にひるがへつて、若鮎の腹の様に美しく光る時もある。

沿道に散在する百姓家を見ると、大抵は横に廣く奥行は淺い。これは室を學校の教室の様に並べて、大家族が住む爲にかも知れない。その屋根は殆ど直線ではあるが、わづかに中低の弧線をあらはし、藁に泥を交ぜて葺いたらしい屋根は、鈍い凹凸を存して、誇張していへば、らつこの皮に似た美しさがある。兎に角非常に安定の感じを與へる家屋である。この滿洲の土から生れた産物であることは一見して分る。中には又鼠色の煉瓦を積んで作つた家の、同じ煉瓦の塀の上には透かしの飾をつけ、彩瓦の屋根を設けたのなどもある。家の側面は石を積んで、その間をセメントで固めたのも見える。

滿洲風俗

誇張

らつこ　哺乳類中の食肉類に屬する海獸。

田野の間に、ある一定の距離を置いて存在するらしい小祠が目に著く。これは何を祭り、何を意味するのか、私の聞いた人は皆知らなかつた。是等の畑や人家の間には、三角形の笠に藍衣を著た百姓の姿が如何にも似合はしい。ある百姓家からは、丈の高い男が小さな五六歳位の子を肩車

似合はしい

仔犬
コイヌ。

より多く親しむ

にして出て來た。男も子供も共にくり〳〵の坊主頭である。牛や馬の放牧されて居る間に、眞黑の豚がのろ〳〵して居ることもある。仔犬位の大きさの黑い小豚に至つては、實に可愛く滑稽である。水の淺い砂河を、牛馬こき交ぜて五六頭に荷車を引かせて徒渉するのも見える。滿洲の景色で嬉しいものの一つは、實にこの家畜の悠々たる生活ぶり、若しくは働きぶりである。日本で見るよりは、家畜は確かに人間の生活とより多く親しみ、自然の景物とより多く調和して居るらしい。驢馬に跨つてゆく子供、白馬に乘つた三角笠の百姓の姿を見ても、直ぐこの感がある。これと似た感じは、西洋の景色を見てもある。

柞
ハハソ。槲の異名。殼斗科に屬する落葉喬木。

一望千里

安倍能成
京城帝國大學教授。愛媛縣の人。明治十六年生。

橋頭驛近くの鐵橋を渡る時、その河岸の處には水車小屋があつた。これは柞を碎いて線香用の粉末にする爲だと案内記にある。何れにしても山を右岸に迫らせ、畑を左岸に控へ、所々の水楊の影に、水車小屋を點じた淸淺な河の景色は好もしかつた。

奉天近くなつて、一望千里の平野になつた。先年三月に此處を通つた時には、まだ雪が一面にこの大平野を蔽うて、刈取られた高粱の殼の堆積が、群鳥の如くにその上に黑く點在して居たが、今は人の二倍近い位の高粱の頭を飾る穗が、滿洲の野の豐穰を語つてゐた。

（安倍能成―青丘雜記）

己が故郷　宮城縣本吉郡。
植ゑる
堪へる
里子
父君　鮎貝盛房。

一二　七株松

七株松とは、己が故郷の家の庭前に、父君の植ゑ給へる松なり。植ゑ給ひし年月は、明治十五年の冬、霜雪降り凍る時なりけり。その折一封の書を寄せ給へり。その中に、「汝等兄弟どもの齢を祝ひて、七株松を植ゑたり。この松の變らぬが如く、よく霜雪に堪へて、學の道を勵み勉めよ。」とあり。

己が兄弟は七人なり。上には姉と兄と各一人、下には弟三人と妹一人とあり。姉一人は家にて育ちしかど、他は皆里子となりて、人の手にて育ちたり。父君はさまで心にとめ給はざりしかど、母君は如何にして、この數多の兄弟を教

ちなむ　緣にたよる。
松岩　宮城縣本吉郡松岩村。

育せんと、常に案じ煩ひ給ひたりとか。明治四年の春ばかり、己と次の弟とを携へて仙臺に上り、それ〴〵學校に寄宿せしめ給へり。一人手を離るれば、母君は暫しも心を慰め給ふ折なし。その後、姉は他に嫁ぎ、己は落合家に養はれ、一人の弟は壹岐家を嗣ぎ、妹は飯田家の養女となれり。家に殘れるは、兄と次の弟とはての弟と三人なり。兄弟の多きは、兄弟そのものの爲には、いふべからざる幸福なれど、親の身に取りては、これより心盡しなるものはなからん。

七株松は七人の兄弟にちなみて植ゑ給へるものなり。その松は七株とも一處に生ひたれど、我々兄弟は未だ嘗て一堂のもとに會したることなし。己、松岩にありし頃は、二

人の弟と妹とは里にあり。己、仙臺にありし頃は、姉と兄とは松岩にあり。兄來る時は弟去り、妹去る時は姉來るなど、あるは二人、あるは三人、多き時も四人より多かりしことはなかりしなり。殊に己は、早くより都に上りしかば、兄弟團欒といふ快樂を得ること最も少かりしなり。

團欒　ダンラン。

同じく十一年、次の弟都に上れり。他鄕にて兄弟に會ひしはこれを始めとす。翌年、その次の弟また上れり。それより二年經て、妹また上れり。されどその折は、次の弟家に歸りてあらず。十五年、次の弟上れり。その折は、その次の弟、大阪に行きてあらず。あくる年、はての弟上れり。他鄕にて四人會したるは珍らしなど語り合ふ。二十年、己、根岸に寓居せり。

根岸　東京市下谷區にあり。

その年の五月、その月の三十日、夜に入りて門を叩く者あり。誰ならんと出で見るに、大阪に行きたる弟なりけり。嬉しと思ひて迎へ入れたり。その弟、養家に急用ありて、明日拂曉此處を出で立たんの心なりといふ。兄弟五人會せんことは、生れて始めてなり。明日は他の弟と妹とを招かんほどに、一日ほど出立を延ばしくれずやと乞ふ。養父の身にかゝはりたる一大事、とてもさることならずといふ。他の弟妹に知らせずして、そなたを出で立たせんには、後にて恨まれもやせん。よしこれより使を遣らんとて、下谷の車坂、神田の今川小路、本鄕の森川の三方へ、手を分けて人を走らす。その時午後十一時少し過ぐる頃なり。

拂曉　フツゲウ。出で立たんの心

恨まれもやせん

一時間ばかりありて、車坂の妹訪ひ來ぬ。また三十分ばかりありて、二人の弟前後に訪ひ來ぬ。五人一室に會したる其の夜の喜、何にたとへん。維新以後家政衰微して、完全なる教育を受くる能はずなど一人がいへば、兄弟のうちにて最も苦學せるはわれなりと一人がいふ。朝とく起きて栗拾ひたること、夜おそくまで起き居て、凧張りたることなど、幼時より今日までの五人の歴史、悉く談話に上りたるもあはれなり。はては父の恩母の愛など、こまかに語り出でて、父君には七株松を植ゑて、我等兄弟によそへ給へり。さばかり我等を思ひ給へり。一日も早く七人の兄弟打寄りて、膝下に孝養をなさまほしきにあらずやといふ。時に時計

なさまほし

午前四時を報ず。窓押開けて、五人ともに上野の方を眺むるに、杉の梢のあたり、不如歸と啼きたる杜鵑、あるは二聲、あるは三聲。その聲如何におのれ等の腸を斷ちたらん。今なほ記憶して忘れず。

（落合直文―落合直文集）

杜鵑　ホトトギス。

此の畫は誰をうつせるならむ。しひて名をつけてと望まる。容貌うたがふらくは、陶氏に髣髴たり。されども例の菊なきはいかに。嗚呼、我是をしれり。東籬すでに霜白うして、五株の柳も骨ばかりなる比か。是を更に冬淵明とはいふなるべし。

菊とりし手もふところや霜の朝

（横井也有―鶉衣）

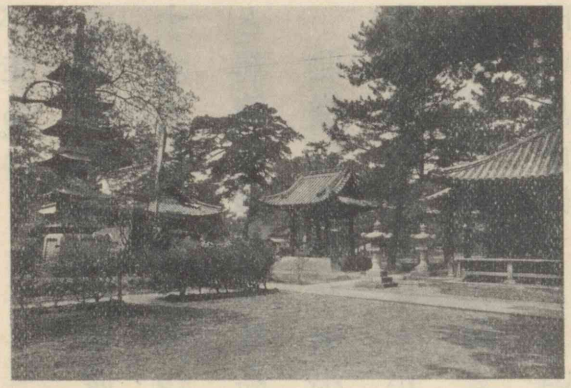
屋島　香川縣高松市の東方にあり。
ぢつと
屋島寺　眞言宗。屋島にあり。源平合戰の古器を傳ふ。
重盛　平重盛。清盛の子。
景清　平氏の臣。惡七兵衞と呼ばる。

一三　朝の海

松風の音であらう。遠い時雨を思はせるほどに微かな夜明けの風が、屋島の浦々から峰へ〳〵と吹きあげて來るらしい。時としては浦波の如く、時としては遠ざかり行く沖の大波の如く、窓近く訪れては、はたと跡絶えてしまふ。ぢつと眼をつぶつて松風の音を聽いてゐると、昨日屋島寺の薄暗い御堂の中で觀た重盛の燈籠や、景清念持佛の尊い御像や、何彼と浮んで來るのであつた。潮に濡れた鎧に美しく描き出された秋草の、さながらに色もあせず見出さるるのもむかしを思うて哀れであつた。昨日屋島寺を出る

鐘樓　ショウロウ。
カーテン　窓掛。
たゆたうて　櫓　ヤグラ。城壁又は城門の上に築きたるたかどの。
山駕籠　竹にて編みたる手輕のかご。山路の用に供するもの。

時、暮れゆく鐘樓の下に立つて見送つてくれた僧の姿までが、とほい昔の人のやうに思はれた。私は窓のカーテンを開けた。高松の町は靄に包まれてゐた。夜はなほ高松の町を廻る裾山にたゆたうてゐた。高松城の櫓が汀に沿うて夜明け方の微かな白い光を漂はせてゐた。燈臺の火もまたゝいてゐた。


屋島寺

山駕籠に心地よく搖られながら、松林の間を走る。枯れ〳〵な冬草の間に、野菊の可憐な姿を見出す。一本々々磨きあげられ

大槌島・小槌島　何れも屋島の北西に點在せる瀬戸内海上の小島にして豐島に最も大なり。
豐島
女木島
男木島
崇德天皇　第七十五代の天皇。
白峰陵　香川縣綾歌郡松山村なる白峰にある崇德天皇の陵。
小豆島　香川縣の東北にある島。
また〳〵いて
なごやか

たやうな屋島の赤松の間を、大槌・小槌・豐島・女木・男木の島影が走る。

「崇德天皇の白峰陵といふのは、あのあたりの山になりますが、まだ霧がかゝつてをりますので……。」

と、駕籠の男たちは、高松の右手の山をさした。

北嶺に達した頃、小鳥が鳴初めた。小豆島を中心に瀬戸内海の無數の島々が空の上に浮ぶ。海は煙つてゐる。海は溶けて朝霧に消えて行く。とり殘された燈臺の燭が、薄暗い島蔭にまたゝいてゐる。

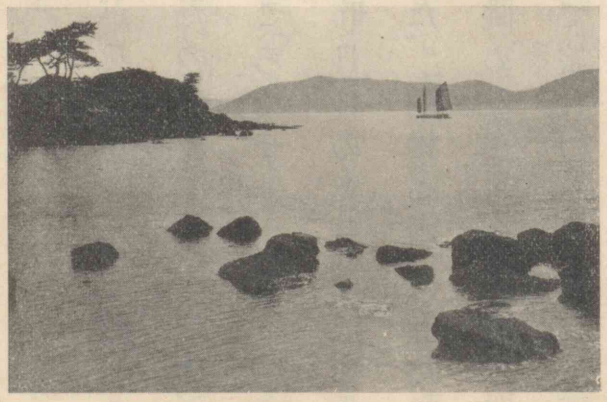
長い航海を終へて歸り行く汽船であらう。夜明け方の海は、いともなごやかに、幸福なる汽船を東へ〳〵と見送る。

阿波の鳴門　德島縣の東北端なる孫崎と兵庫縣淡路島の西南端なる鳴門崎との間なる海峽。
須磨　兵庫縣神戸市須磨區。瀬戸内海に面す。
明石　兵庫縣明石市。瀬戸内海に面し須磨の西にあり。

相迎へ相去る、一つ〳〵の小島に、朝の祝福を投げつゝ、船は行く。船は思ひ〳〵の旅人の心を載せて、朝の海を辷つて（すべつて）は島影を縫ふ。海は明け方の空を映して、五月の山よりも青く、空よりも廣い。

「阿波の鳴門がこの見當でせう。これが須磨・明石……。このあたりに雲に包まれた大山が見える筈ですが。」

私は振りかへつて見た。其處にも見知らぬ二人づれの旅人が、朝の海を越えて、中國あたり



屋島の海岸

の山を眺めてゐた。私たちは、屋島の嶺に上つて海に面する方へ出た。

「この岬の陰が、船隱といつて、平家が兵船を隱して置いた處ださうです。梶原が攻寄せて來たのは、こゝなんです。」

「那須與一の扇の的が、あの岸のところですよ。」

やゝ波が高くなつて來た。私は、昨日、日の暮るゝ頃、佐藤嗣信の墓に詣でたことを思ひ出した。朝霧の中に洲崎寺、嗣信の墓のあたり、或は總門の跡を眺めながら、船は壇の浦の汀へ近く走る。波は立ちに立ちて旅人の心をぬらす。

住みなれし都のかたはよそながら袖に波越す磯の松島

梶原　梶原景時。源頼朝の臣。

那須與一　源義經の臣。

佐藤嗣信　源義經の臣。

總門　ソウモン。そとがまへの正門。

壇の浦　香川縣屋島の東方にあり。

よそながら

新中納言知盛の歌を想ひ出す。私は昨日、日が暮れて遂に菊王丸の墓を訪ねなかつたことを名殘惜しく思つてゐた。

今日は、波さへ無ければ瀨戸内海を横切つて、鞆町に出て、京都へ歸る積りであつたが、波が高いために船をやることが出來ない。自然、船を屋島の岸に繫いで、再び壇の浦邊を訪ねることになつた。菊王丸の墓に詣ることの出來たのも、何かの宿緣であらう。鹽を燒く小屋のあたりに廻り、やがて港に沿うて走つてくる村の童たちに、菊王丸の墓をたづねた。

「菊王丸さんの墓なら知つてゐるよ。」

童たちは先に立つて、枯草の中を七八丁も飛んで行つた。

知盛　清盛の子。

菊王丸　能登守教經の侍童。

鞆町　廣島縣沼隈郡にあり。福山市の南に當り瀨戸内海に面す。

宿緣

塔婆　タフバ。卒塔婆の略
能登殿　平敎經。敎盛の子。
平家物語　平家一門の盛衰を記したる軍記物語。
萌葱　モエギ。黄と青との間色。
腹卷　腹に卷きて背に合はす如くに作りたる鎧。
草摺　クサズリ。
まゆみ　にしきぎ科の落葉小喬木。山野に自生す。

埃の多い道から二三間離れたばかりのところに、蔭深い木立の下に、石を積みあげた塚がある。其の塚の後に、苔蒸したさゝやかな塔婆がある。菊王丸の墓である。「生年十八歳にぞ成りにける。」能登殿、この童を討たせて、餘りに哀れに思はれければ、その後は軍をもし給はず、」云々。荒れ果てた路傍の塚の前に佇んでゐると、平家物語の記事がさながらに浮んで來る。萌葱匂の腹卷を著、草摺のはづれを射貫かれて、船中に運ばれてゐるけなげな若武者の姿が映つて來る。

案内してくれた濱の子供たちは、菊王丸の墓をおほふやうに繁つてゐるまゆみの眞つ紅な實をもぎとつては、無心にその數をかぞへてゐた。

吉田絃二郎　名は源次郎。文學者。佐賀縣の人。明治十九年生。

靜かな朝の潮を隔てて、源平の若武者たちの墓は、霧に包まれて眠つてゐた。海は、微かな松風の音を、旅人の耳に殘して輝き始めた。鳴きつれてゆく千鳥の跡を、ぢつと見送つてゐれば、旅人の心はさすがに沈む。

「大きな汽船だ！」菊王丸の墓のまゆみの實を弄んでゐた子供たちは濱に立つて叫ぶ。

瀨戸内海を西航する汽船が、沖の小島をかすめてゆく。

（吉田絃二郎）

馴染
しをらしい
漂うて
漂ひて

一四　根の營

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中にどうなつてゐるかは、餘り考へて見た事がなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い淸らかな綠の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨が降ると、幹の色はしつとりと落著いた、潤のある鮮かさを見せる。綠の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽やかな氣分が、樹の色や光の中に漂うて、如何にも朗かな生の喜がそこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節かはいゝ小鳥の群が、活き〳〵した聲で囀り交はして、綠の葉の間を樂しさうに往き來する。――それが私の親しい松の樹であつた。

生ひ育つ
簡素

然るに、或時私は松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處に佇んで、砂の中に喰込んだ複雜な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が、何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に竝んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、――それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力を盡したやうに、枝から枝と分れて、女の亂れ髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれるぐらゐ太い根、細い根が一齊に大地に抱きついてゐる。

私はこの様な根が地下にあることを知つてゐた。併し、それを目の前にまざ〳〵と見た時には、思はず驚異の情に打たれぬ譯には行かなかつた。私は永い馴染の間に、このやうな地下の苦みが、不斷に彼らにあることを、一度も感じたことがなかつたのである。彼の苦みの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼の苦しさうな顏を見たのは、濕りのない炎熱の日が、一月以上も續いた後であつた。併し、その叫び聲や萎れた顏も、その時さへ過ぎればすぐにもとの快活に歸つて、苦みの痕をめつたにあとへ殘さない。而も彼らは、我々の眼に祕められた地下の營を一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の風

痕　アト。

に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこの様な苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心から親みを感ずるやうになつた。彼らは我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも言へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈地だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つく〳〵敬服するやうな氣持になつた。

高野山　和歌山縣伊都郡にある靈山。

不動坂　坂の上に不動堂あるを以てこの名あり。

弘法大師　空海。眞言宗の開祖。承和二年歿。年六十二。（一四三四―一四九五）

見識

外郭

金剛不壞　コンガウフエ。金剛の決して崩壞せざるをいふ語。金剛は金屬中の最も剛堅なるもの。

亭々たる巨幹　強靭　キヤウジン。

それは、外郭に連なる山々によつて、平野から切離された、急峻な山の斜面である。幾世紀を經て來たか分らない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷のない、壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹々の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた〳〵と人間の肌にも迫つて來る。私は、底力のある興奮を、心の奥底に感じ始めた。

私の眼は、すぐに老樹の根に向つた。地下の烈しい營は、既に地上一尺の處に明かに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へる爲に、太い强靭な根は力の限り四方へひろがつて、地下の岩にし

神祕

敬虔　ケイケン。つゝしみかしこむ意。

つかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけで我々に驚異の情を起させる。確かに烈しい生の力の營によつて、殘る所なく包まれてゐるのである。我々は、それを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れた努力の威壓が、神祕の影をさへ帶びて、我々に敬虔の情を起させずにはゐなかつたのである。

私は、老樹の前に、根の淺い自分を恥ぢた。さうして地下の營に沒頭することを、自分に誓つた。今、氣づいてもまだ

遲くない。

成長を欲するものは、まづ根を確かにおろさなくてはならぬ。

上に伸びることをのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

早年にして成長の止まる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ人がある。下に喰入ることに沒頭してゐたからである。

私の知人にも、理解のいゝ頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人

おろそか。

がある。彼は今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる値打がないとさへ思つてゐる。しかしそれは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する努力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が、彼の上に起るか。――私は彼の前途を信じてゐる。根の確かな人から、貧弱な果實が生れる筈はない。

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に、彼らの仕事は、味はへば味はふほど深い味を示してくる。

現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが小さい植木鉢のなかの仕事に墮して

地殼　地球の外部の岩石にて複雜に構成せられたる部分。

ゐはしないか。如何にすれば珍らしい變種が出來るだらうか、如何にすれば豫定の時日の間に注文通りの果實を結ぶだらうかとか、總てがあまりに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出來ない。

天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生れる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

（和辻哲郎―偶像再興）

纖細　センサイ。

いぢける　畏れ縮まる。

和辻哲郎　文學博士。哲學者。東京帝國大學教授。兵庫縣の人。明治二十二年生。

一五　はやり詞

いつの時代にも一種の流行語といふものがあつて、其の時代の反映をなして居る。吾等が幼き耳に、慈母から聞いたお伽話の中にある日本一の黍團子や、日本一の花咲爺などいふ場合に使はれた日本一の語も、その起源を探つて見ると、やはり一時代の流行語として廣く用ひられた語で、確かにその時代の國民精神を表現してをるのである。尤も日本一などといふほめ詞は、如何なる時代でも誰でも自らこしらへて使ひ得る詞には相違無いけれども、それが一時代に非常に流行してをるのを見て、その當時の國民の思潮

反映

國民精神

思潮　シテウ。

すべて人には云云　清少納言の枕草子に出づ。
濱松中納言物語　菅原孝標女の著。平安時代後期の物語。
大鏡　文德天皇より後一條天皇に至る百七十餘年間の歷史を假名混り文にて記したる書。平安時代後期の作。

がいかばかり高まり、上下の元氣がいかばかりに壯んであつたらうと想像されるのである。日本一といふ形容語は、足利時代より德川時代の初期へかけてのはやり詞と自分は認めるが、その以前に用ひられなかつたのではない。優にやさしき平安朝の宮廷裡の婦人でさへ、きかぬ氣のものであると、「すべて人には一に思はれずばさらに何かせむ。二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらむ。」などいふ位の見識があつたのだから、日本一といふ程の考がないわけはあるまい。濱松中納言物語・大鏡などにも、はや「日本一」「日本第一」といふ賞美語がいづれも二

新村出

平治物語　平治の亂の顚末を記したる軍記物語。
俗語
曾我物語　曾我兄弟仇討の物語。
義經記　源義經一代の物語。
宣旨　センジ。
常磐御前　源義經の母。
候ひし

箇處ほどに見える。又下つて鎌倉時代になると平治物語や平家物語の如き軍記物には、「日本一の不覺人」とか、「日本一の剛の者」とかいふ文句があり、當時代の初期の文書には、「日本第一の天狗」などと出てくるので、段々廣く用ひられて來たやうである。しかし足利時代になると、この俗語は益頻繁に用ひられ、又その意味も頗る擴張されてをるのである。曾我物語には、「日本一の不覺人」といふ句が出てをるが義經記になると數箇處に見えてゐる。例へば靜御前を讃美して、「舞においては日本一にて候。」といひ、「日本一といふ宣旨を賜はりけると承り候ひし。」といひ、又常磐御前の容色の美しきを、「日本一の美人なり。」などと稱へるやうに、最上級の讃美

言としてあちこちに使はれてゐる。謠曲などに「日本一の御機嫌にて候。」「それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」「日本一、烏帽子が似合ひ申して候。」などの使ひざまになると如何にこの語が流行したかがわかり、從つて意味が大分擴がつて來た事が知れる。謠曲で用ひてある以上は、狂言の上にあるのは當然の話で、「日本一の下手」といひ、「日本一の大小」などと見える。要するに足利時代は國民の元氣の大いに勃興した時代である。朝鮮や支那の沿岸を荒しまはつて、所謂倭寇を試みた時代である。高麗及び朝鮮との交通や、明との交通も盛んであつた時代である。末期になると、西洋や南洋との交通も開けたし、對外精神の發展は、遂に征

謠曲　エウキヨク。うたひ。
狂言　能樂の間に行はるゝ一種の滑稽なる演技。
まはる
倭寇　ワコウ。
對外精神

韓の擧を起さしめるやうになつたのである。かくの如く外に向つて大いに膨脹し、侵略し、飛躍せんとする元氣を持つてゐた當時の我が國民は、內に在つては常に覇者たらんとする氣概を有し、清女のいはゆる「一に思はれずば、さらに何かせむ。」の意氣を持ち、日本一・天下一・三國一たらんずる心がけがあつたものと思はれる。

徳川時代は鎖國時代・封建割據時代である、國民精神の萎靡時代である。立派な覇者が唯一人江戸に構へて御座つた時代である。この征夷大將軍が卽ち天下一であり、日本一であつたのである。當代の民衆は將軍の威光を謳歌しつゝ、「日光を見ないうちに結構といふな。」といつた。日本一

膨脹　バウチヤウ。
覇者　ハシヤ。
清女　清少納言。
封建割據時代
萎靡
征夷大將軍
謳歌　オウカ。

のかはりに寧ろ日光一といふ語でも出來さうなものであつたと思ふ。しかし、德川氏の時代に日本一の語が流行したことは、葡萄牙人の書いた日本文典の中に、形容詞の最上級として、この語を天下一といふ語と共に擧げて、「彼奴は日本一大けなげ者ぢや。」「天下一の學者である。」などの例を示してをるのでも知れよう。當時流行の俳諧でも、月花を賞めるには、猶往々この語を用ひ、「唐までも日本一の月夜かな。」などとやつてゐる。かの醒睡笑にも、「やれ、日本一の鈍なる弟子。」とか、「われは日本一の事をたくみ出いたは。」とか、「紙は日本一の播磨杉原。」とか見えるので、一般の事が推される。

さて足利時代には、獨り日本一のみならず、すべて何々一

彼奴

けなげ者

醒睡笑　八卷。元和時代に出たる輕口噺の本。安樂庵策傳著。

播磨杉原　播磨の國より產出する杉原紙。

といふことがはやつたもので、坂東一・四國一・中國一・西塔一、猶進んでは天下一・三國一などの語がある。天下第一の稱は、既に漢籍にも見えてをるのであるが、我が足利時代中葉の抄本にも見え、以後の軍記及び俗文學にも非常に多く使はれてをる稱號である。この稱は大抵、藝術界の優勝者、卽ちチャンピョンといふやうな意味で、一種の尊稱である。從つて俳諧にこの名が甚だ多く見え、月花を愛でるにも、やたらに天下一・天下第一といつたものである。かくの如く流行した結果、餘り亂用し過ぎたので、遂に天和二年に、器物に天下一の字を記すことを禁ぜられた。一體、時代からいへば天下一の將軍の下に、むやみに天下一などと稱するのは

西塔　比叡山延曆寺の西塔。

中葉　中世に同じ。

抄本

俗文學

チャンピョン

天和二年　靈元天皇の御代。將軍德川綱吉の時代。（二三四二）

元祿　東山天皇の御代の年號。將軍德川綱吉の時代。（一六八八―一三六三）

天竺　テンヂク。印度の古名。

震旦　シンダン。支那の古名。

不都合の至りなのであらう。天和二年といへば元祿の少し前で、はや大分德川時代の風潮が變つて來た。これで全く廢れたのではないが、戰國時代に流行しはじめた語が、太平の時代に衰へるのも、言語の運命上然るべき話だ。

天下一に次いでは、三國一といふ語が、やはり同時代に流行したものである。これも始めは廣く用ひられた賞美語であるが、月・雪・花を愛でたり、美人をほめたりするほか、最も多くは嫁入や壻取の場合の祝辭に用ひられた。狂言に女子の姿の美なるを稱へて、「天竺・震旦・我が朝三國一ぢやよの。」といひ、秀句好きなるを、「唐土・天竺・我が朝三國に隱れがおりない。」と形容したり、醒睡笑に、「老僧のはたらき三國一。」などと、

新村　出　文學博士。言語學者。京都帝國大學教授。靜岡縣の人。明治九年生。

いつたりする。後世は嫁入・壻取か、さもなくば甘酒屋の看板に名殘を留めてあつて、現今も天下一などの美稱と共に國產物などには記してあるのを折々見うけるが、まづこゝらが結末であらう。三國といへば、昔は日本・支那・印度であつたものが、今は露・佛・獨とか、日・英・米とかいふ工合に變つたのだから、右のやうな始末になるのも、當然の話である。

日本一を始め、これらの語はみな足利時代からの流行語であつたが、時代の變遷と共に段々廢れてしまつた。まあこれからは世界一といふ語か、さもなくば、「日本で第一。」といふ意味でなく、「日本が第一。」といふ意味で、日本一といふ語をはやらせねばなるまい。

（新村　出―南蠻記）

日蓮上人　日蓮宗の開祖。安房（千葉縣）の人。弘安五年歿。年六十一（一八八二―一九四二）

法華經　妙法蓮華經の略稱。支那・日本に通じて最も弘く流布したる大乘經典の一。

高天闊地

豪邁

一六　日蓮上人の人格

日蓮上人は、獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るとも驚かず、法華經の爲ならば此の頭を刎ねらるとも悔いじと覺悟し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の大豪傑なりき。

高山樗牛

さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

四條金吾　名は頼基。

江馬遠江守　名は光時。

不惜身命　身命を惜まず。

龍口　神奈川縣鎌倉郡にあり。

日蓮上人辻説法　野田九浦筆

上人の信者に、四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人とともに諸の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上

慟哭　ドウコク。

藹然　アイゼン。氣のおだやかなるさま。

島二つ　壹岐と對馬。

に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に現ずべし。」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れたり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの內に、

身延山　山梨縣南巨摩郡にあり。

池上　東京市大森區池上町。

檀越

波木井氏　南部實長の事。甲斐の國（山梨縣）の人。

舍人　トネリ。

五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間、五十餘町の嶮山を、一日も缺かさず、一日に一度は必ず攀ぢ登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に、これと比較し得べき美談ありや。

上人病篤くして、甲州の身延より、武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を附け候ては覺束なく覺

え候。罷り歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候。」と、しるされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は、人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ、偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくば、かの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し、融會して、こゝに豪傑の全人格をつくるなり。かの麗しき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲卽ち刺を織る絲なるにあらずや。

（高山樗牛―樗牛全集）

あればこそ……
……あるなれ

高山樗牛　名は林次郎。文學博士。山形縣の人。明治三十五年歿。年三十二。

一七　兵營參觀

營門には嚴めしく歩哨が立つてゐた。

「面會ですが。」と言ふと、衞兵所を指して、「あそこでどうぞ。」とやさしく敎へてくれた。

衞兵所へ來て、第九中隊第三班太田上等兵に面會の旨を告げて、「太田の妹です。」とつけ加へた。

ふと衞兵所にかけてある時計を見ると、三時四十分であつた。まだ兄さんはお仕事の最中ではないかと氣遣つてゐると、日にやけた、元氣さうな一人の兵隊さんが、「太田君の妹さんですか。自分が呼んで來て上げます。」あちらの面

歩哨　ホセウ。みはりの歩兵。

武骨

會所で暫く待つてゐて下さい。」とにこ〳〵しながら面會所の前まで連れて來てくれた。

面會所の前には、枝の長く垂れた柳と、まばらに紅葉の殘つてゐる櫻とが竝んで植ゑられ、そゞろに春の頃を思はしめた。武骨な兵營にあるだけ、一層心を引かれた。面會所は、そんなに廣くはないが、机と腰掛とがきちんと竝べてあり、壁には軍事に關する繪畫の額面が掲げられてある。

兄さんが東京から鄕里の聯隊へ入營したのは、一昨年だつた。入營後、寫眞だけは度々送つて貰つたが、お逢ひするのは今日が初めてだ。眞黑く、さつきの兵隊さんのやうに、日にやけてはちきれさうに太つて……などと想つて居ると、

矢繼早

「太田上等兵殿はすぐに來られます。」

と、案内してくれた兵隊さんが、不動の姿勢をとつて居る。驚いて私も姿勢を正して頭を下げた。

太田上等兵殿の殿が妙に耳についてをかしく感じた。お友達でも殿といふのかと思つた。

そこへ兄さんが笑ひながら入つて來た。

「やあ。」高い聲だ。「隨分待たせた。丁度初年兵教育の助手をしてゐたので遲くなつた。東京のお父さんお母さんはお達者か。兵營は始めてだらう。」矢繼早で私は何も言ふことが出來ぬ。

「兄さん元氣ね。」

「うむ、眞黑くて驚いたらう。」

「でもいゝわ。ね、兄さん。兄さんは上等兵殿ですね。お友達でも殿なんかつける。」

「うむ、軍隊では大佐までの上官には殿、少將以上には閣下といふ敬稱を用ひるのだ。上等兵殿、軍曹殿、少尉殿、中隊長殿、大隊長殿、聯隊長殿、それから少將閣下、中將閣下といふ。旅團長は少將、師團長は中將だから矢張閣下といふのだ。さつき迎へに來た兵は一等兵だから、上等兵の俺に殿をつけたんだ。」

「まあ面倒なのね。」

秩序　チツジヨ。

統制

涵養

「いや面倒といへばさうかも知らん。だが、かうして秩序をたて、禮儀を重んじ、命令服從の關係を律するわけだ。」

「ぢや、隨分窮屈でせう。」

「世間では兵營生活を窮屈のやうに思ふが、何處だつて必要の統制下に於ける生活が氣隨氣儘であり得る筈がない。兵營生活だつてその通りだ。

『兵營ハ苦樂ヲ共ニシ、生死ヲ同ウスル軍人ノ家庭ニシテ、兵營生活ノ要ハ、起居ノ間、軍人精神ヲ涵養シ、軍紀ニ慣熟セシメ、鞏固ナル團結ヲ完成スルニ在リ』と軍隊內務書に示されて居る。」

「初年兵教育の助手太田上等兵殿。」

百聞一見に如かず

「まあ茶化さずに聞け。だから中隊長殿がお父さん、班長殿がお母さん、戰友は兄弟と言ふわけだ。百聞一見に如かず、とにかく營内を見ないか。」

兄さんは衞兵所へ行つて何か話された。

「今に見學の許可が來る。それまで此處で待たう。」

それから暫くたつて、兄さんの後について廣い營庭に出た。見學を許されたのだ。

劍光

炊爨　スヰサン。めしをたくこと。にたき。

オーツ、オーツといふ聲、勇ましいと言ふより、壯烈と言つた聲が聞える。銃劍術をやつて居るのだと兄さんが教へてくれた。どんな敵でも破碎し盡す日本軍の突擊、そして格鬪と思ふと、その聲が身内にひし〳〵と應へる。

向うでは銃を持つて教練をして居る。體操場では上衣を脱いだ兵隊さんが、鐵棒にぶら下つて居る。ランニングをしてゐる組もある。その傍を通つて炊事場をのぞく。蒸汽炊爨だ。濛々と湯氣が立つて居る。黑板に獻立が書いてある。兵營といふ大世帶のお臺所、それが今夕食の準備中といふのに、何處にも取亂された所がなく、混雜した所もない。默々と炊事專務兵が働いて居る。

內務班

浴場の前を通り裏へ廻ると、銃工場・靴工場・縫工場などがあつて、兵隊さんが、銃・劍・軍靴・被服などを修理してゐた。兵隊さんでも、かうした仕事をするものは、銃工兵・靴工兵・縫工兵といふのだと兄さんが說明した。演習ばかりして居ると思つたのは間違ひだつた。兄さんは、物珍らしく見廻す私をせき立てて、內務班へ案內してくれた。班とはお部屋の事だ。一つの中隊がいくつものお部屋になつてゐる。中隊の入口には事務室があり、その向うに中隊長室があつた。兄さんの班は二階の南側にあつた。

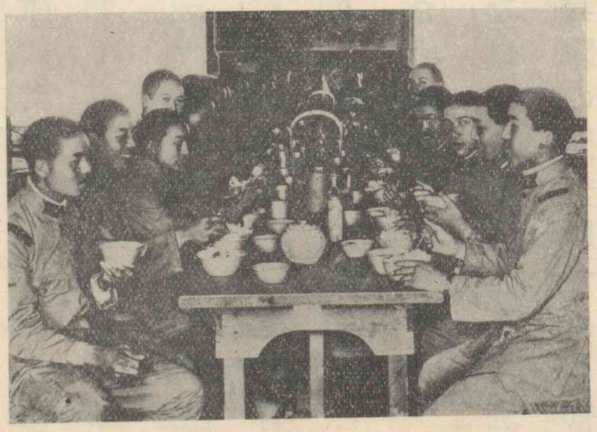
「こゝが僕の居間、兼寢室、兼書齋、兼食堂だ。」といやに兼を入れる。寢臺が二十四程、兩側に正しく列んで居る。棚の上

には手箱がある。日用品その他私物が入れてあるといふ。その横に被服類がきちんと疊んで積み累ねてある。軍衣袴・襦袢・袴下・外套夫々の置き場、累ね方が皆一樣になつて居る。

かうしてあるから暗黑の中でもまごつかず、手探りでもすぐ支度が出來ると、兄さんが說明に付け加へた。

棚の下には靴が二足、その横に雜囊・水筒がかけてある。雜囊の中には、常に針・糸・鋏・刷毛などが入つて居る。隨分澤山のも

雜囊　ザツナウ。



會食

のを持つて居ると思つた。

此の外、戰用品は別に戰用品倉庫にちやんと準備してあるとのことだ。

「どうだきちんとして居るだらう。疊んだものの寸法、懸けたものの角度まで同じだ。かうした環境に日夜起居すると、いつか心まで清く正しくなる。軍隊が整頓を嚴しく言ふのは、つまり吾々の心を整頓さす爲なのだ。」

兄さんは、をかしいくらゐ眞劍な口調で說明した。班を出て酒保へ行く。「つまり、酒保は兵隊の慰安所であり、營內の賣店である。此處で兵隊は日用品を買ひ、戰友と餡麪麭や大福餅などを食べて、樂しく談笑する。酒も一週一度土

環境　クワンキヤウ。

餡麪麭　アンパン。

曜日だけ、それも好きなものに量を限つて賣るが、青年禁酒の今日だ、成るべく飲まぬやうに躾けられて居る。」

兄さんの聲が高いので、此處で戰友と何か話して居た兵隊さんが振り向いた。

「どうだ、お前も一度入營して見たくなつたらう。」

と、酒保の歸りに、兄さんが話しかけた。

「來られるものなら。」

「お生憎樣だ。男子の特權、易々とは渡されない。だが、子供を立派な男子に育て上げるのは女の特權だ。そこはよろしく賴む。」

言ひ度いことを言ふ。けれど兄さんの動作のきびく

特權

して居るのと、言葉の齒切れのよいのには、全く感心した。

兄さんも立派になつたものだ。

「おい、歸るか。」

「兄さん、いや太田上等兵殿、これでお別れ致します、失敬。」

面會所に誰も居らぬので、不動の姿勢をとつて擧手の禮をして見た。

「よし行け。」

兄さんも上等兵のやうに威嚴のある聲だ。然し眼には微笑が浮んでゐた。營門を出て振り返ると、そこに兄さんがまだ立停つて見送つて居た。喇叭がかすかに營內から聞える。

（齋藤　瀏）

齋藤　瀏　陸軍少將。長野縣の人。明治十二年生。

生存競爭　生きながらへんとすることより起るあらそひ。

自然淘汰　外界に適したるものは生存し適せざるものは死滅することをいふ。

一八　簡單より複雜へ

生存競爭に於ける勝敗の標準は、その時々の事情で違ふから、總ての動植物を通じて自然淘汰の結果を論ずることは出來ぬが、現在の動植物を悉く集めて彼此比較して見ると、大部分に就いては稍一定の方向に進む如き勢ひが見える。一定の方向とは、卽ち體の構造が、簡單より複雜に向ふことである。

人間社會の有樣を見るに、野蠻國では、各個人が皆自分の生活に必要な衣食住の用品を造り、一人にて家も建てれば衣服も造り、獵もして、少しも他人の手を借らぬから、一村落

擔當　タンタウ。

分擔　ブンタン。業務又は責任の一部分づつを分ち擔ふこと。

分業

内の人間が、悉く一人づつに離れても、生活には不自由を感ぜぬ。然るに稍開けた國へ行けば、生活に必要な仕事を個人の間に分配し、各個人はたゞその擔當の業務のみに力を盡し、家を建てる者は常に家ばかりを建て、他人の分までも建てる代りに、衣服・食料は他より得て生活し、また衣服を造る者は常に衣服ばかりを造り、他人の分までも造る代りに、住家と食料は他人より仰いで暮して居る。斯く事業を分擔すれば、同一の個人は、長く同一の業に從事し、隨つてその業に熟達するから、一人で何でもする野蠻人に比較すれば、家でも衣服でも無論遙かに立派に出來る。更に最も開けた文明國では、分業が最も進んで、蝙蝠傘の骨ばかり造る工

餡　アン。

燧石　ヒウチイシ。火打鎌と打合はせて火をとる石英。

石鏃　セキゾク。石製のやじり。

螺旋　ラセン。

場もあれば、饅頭に入れる餡ばかりを造る會社などもあつて、各個人のなす爲事は甚だ狹くなり、その代りにその爲事は極めて精巧な域に達する。されば今日一國の文明野蠻の度を測るには、分業の行はれることの多少を以て標準とするより外はないが、さて文明國と野蠻國とが戰爭をすれば、いづれが勝つかといへば、是は素より論ずるにも及ばぬことで、同じやうに武器と名はついてゐても、野猪や鹿を獵する片手間に燧石を缺いて造つた石鏃と、螺旋を造る職工は螺旋のみを造り、筒を磨く職工は筒ばかりを磨いて居る兵器工場の製作品とは、到底相對すべきものではない。それ故、實際野蠻國は漸々文明國に攻取られ、野蠻人は追々文

明人に敗れて斷絶せんとする有樣である。是は極端と極端との比較であるが、斯く懸隔の甚しくない場合でも、理窟は全く同樣で、分業が少しでも進んだ方が必ず爲事が幾分か優るわけ故、他の事情が總て同一である場合には、分業の進んだものの方が勝つと見てよからう。

動植物の生存競爭に當つても同樣なことがある。凡そ動物が生活して行くには酸素を吸入れることも必要であり、滋養分を全身に循環せしめることも必要であり、炭酸瓦斯その他の排泄物を體外へ出すことも必要である。また運動も感覺することも必要であるが、今こゝに多數の動物個體があつて互に相競爭すると假定するに、身體の各部の

懸隔（ケンカク）。
酸素　無色無味無臭の氣體。地球上最も多量に存在す。
循環（ジュンカン）
炭酸瓦斯　無色にして微臭を有し、やゝ酸味ある氣體。腐敗・燃燒・動物の呼吸等によりて生成せらる。
排泄物（ハイセツブツ）。
個體（コタイ）

間に分業の行はれることの多いものは、人間社會の有樣に比較しても解る通り、これら各種の爲事が皆善く行はれるから、分業の行はれることの少いものに對して勝つ見込がある。是が代々幾分づつか勝敗の標準となれば、身體各部の間に分業の行はれぬ動物の子孫も、長い間には自然淘汰の結果、少しづつ分業の行はれる動物に進化するわけであるが、同一の組織で種々の爲事を均しく完全に行ふことは出來ず、運動するには運動に適する組織、感覺するには感覺に適する組織が必要であるから、分業の行はれると同時に身體各部の間に組織構造の相違がなければならぬ。卽ち運動を擔當する部は筋肉組織となり、感覺を掌る部は神經

神經（シンケイ）

感覺器　そとからの刺戟を感じうける器官。

鰓　エラ。

滋養分

組織・感覺器となり、消化の働をなす處は胃腸となり、呼吸を務める處は肺或は鰓となり、分業の進む程身體の構造も是に伴なうて益〻複雜になるものである。

分業の結果として生じた各組織は、恰も文明國の個人の如く、生活に必要な事業の中、たゞ一種だけを擔當し、他の事業は一切是を他に委ねて、その結果を收めるのみである。例へば運動の組織なる筋肉は、たゞ運動のみを務め、感覺の組織なる神經は、たゞ感覺のみを掌り、他の組織の吸入した酸素、他の組織の消化した滋養分の分配を受けて生きて居る。それ故若し運動の組織だけ、或は感覺の組織だけを取離したならば、到底獨立に生存することは出來ぬ。分業の

親密

進んだ動物の個體は、一種毎に皆異つた働をする組織が多數に集つて出來て居るから、その全部が完全でなければ生活が出來ず、一部づつに離しては忽ち死んでしまふ。斯く身體の諸部分の間に關係が親密で、全部完全でなければ生存が出來ぬといふことから、生存競爭に於て、遙かに分業の進まぬ生物に比して、不利益な場合もないとは限らぬ。しかし競爭者が雙方ともに分業の進んで居るときには、確かに一歩でも分業の先へ進んだものの方が勝利を得る見込を有する譯であり、且生存競爭の最も劇しいのは、互に最も相似た種類の間であるから、代々この標準に隨つて淘汰が行はれて、先づ簡單なものより次第に複雜な構造を有する

ものに進化し來つたと考へなければならぬ。實際動植物を多く集めて比較して見ると、分業の行はれぬ簡單なものから分業の進んだ複雜なものまで、漸次進歩する有樣を明かに順を追うて見て行くことが出來る。（丘淺次郎―進化論講話）

追うて　追ひて

丘淺次郎　理學博士。東京帝國大學出身。東京高等師範學校名譽教授。靜岡縣の人。明治元年生。

木枯のはてはありけり海のおと　言水

わが寢たを首あげて見る寒さかな　來山

枯蘆や難波入江のさゞら波　鬼貫

山寺に米つくほどの月夜かな　越人

貧交

交りは紙衣の切をゆづりけり　丈草

一九　我が文化の將來

日本文明の發達の跡を顧みれば、常に外國文明を取入れて是を日本化して來た。即ち印度に起つた佛教を取入れて益〻發展せしめ、今なほ是を保存して居る。支那から儒教を輸入して、これ又その思想をとつて自己のものとし、加ふるに國字を工夫して國文學を起した。キリスト教は遙か後に輸入されたが、漸次日本化しようとして居る。而して現代は科學を輸入して是を利用する時期が到來しつゝある。見來れば皆外國文明の模倣のやうであるが、純粹の模倣ではない。模倣しては自分のものを作つたのである。

模倣　モハウ。

體得
發祥地
文化的事業
必ずや。
渾然　コンゼン。
分析　こまかにわかつこと。

或は少くとも是を體得した。佛教も儒教も、その發祥地に滅びて、日本にのみ殘つたのである。更に考へるに、過去に於ける日本では、優良なる素質を有するものが、戰術と宗教との方面に集つた爲に、他の文化的事業に於て貧弱であつた感がある。然るに今や偉材はあらゆる方面に向つて居るから、若しも我等及び我等の子孫が、先輩によつて示された模範に倣つて努力を續けて行つたならば、必ずや近い將來に東西の兩文明は、日本民族によつて渾然たる一體に融合せしめられ、古今未曾有の大文明が、東京を中心として起るであらう。その理由の主なるものは、

一、西洋文明は分析的であるから、是を學習することが

綜合　すべあはすこと。

容易である。是に反して日本の文明は綜合的であるから、歐米人が日本の文明を理解することは、日本人が西洋文明を體得する樣に容易には行かない。而して日本民族は、此の比較的、學習に困難な方面を先づ發展せしめ、更に西洋文明を輸入して居るから、兩種の文明を融合するに最も好都合な立場にある。我等の祖先と現代の日本民族とは、國語の學習に極めて多くの負擔を荷ひ、その上に外國語を學習する爲に二重の重荷に苦しんで來たが、その努力は今や漸く酬いられようとして居るのである。

二、二つの高い文明を融合したものは、その一つのものを發達せしめたものよりも、一層高い文明である。此の意

味に於て、東西兩文明の長所を採つて融合したものは、古今未曾有の最高文明である。

三、先進國は、天産物が豐富である上に、自然科學の知識を極力應用して居るから、所謂文明の弊を早くから受けて居る。而して今やその弊に耐へられない情勢を呈しつゝある。文明の弊の中で最も重大なのは、歡樂を追求して物質過重主義になることと、種々の原因によつて出産率の減少することとである。

四、日本の位置は、東西兩文明の接觸點として最も重要な地位を占めて居り、その氣候は文明の發達に適して居ることである。

先進國

自然科學　自然の世界に關することを研究する學問。理化學の類をいふ。

物質過重主義

ルーズヴェルトは曾て次のやうにいつた。曰く、「昔、羅馬帝國の衰亡と共に、地中海時代は終りを告げた。大西洋文明の時代は目下その絶頂にあるが、これまた遠からず資源の枯渇を見るに至るであらう。而してこれに代るものは、實に太平洋時代である。惟ふに太平洋時代は、前記三時代中、最盛を極めるものであらう。それは世界全人類を包容して一團となすものであるから。抑人類は、次第に西へ西へと移住を行ふもので、その結果遂に地球を一周して、今やアメリカの西部の人々は、太平洋を中央にして、アジア大陸在來の人種と相對立して居る。米國人の運命は、右人類の新運動に伴なふ難關の第一線に立つものである。」と。

ルーズヴェルト　米國の政治家。第二十代大統領。（一八五八―一九一九）

枯渇　乏しくなること。

太平洋時代は既に到來した。而してこゝに大文明の起るべき機會に遭逢した譯である。日本民族の使命は、實に重大である。而して日本民族は、この重大使命を遂行するに十分な心身の力と、適當な氣候とに惠まれて居るのである。

日本民族の前途は、洋々として希望に滿ちてゐる。而もそれは、可能性である。この可能性を實現する爲には、我が民族の各員の思慮と努力とを必要とする。決して、單に日本民族の優越性を自負したり、外國人の言動を模倣するだけでは得られるものではなく、日本民族の大使命を自覺し、その實現に向つて精進することによつてのみ達し得られ

遭逢

遂行　スヰカウ。

可能性　出來るべき性質。

る。

フイエは、歐洲各民族について考察し、最後に結論として、「未來はアングロ-サクソンのものでもなく、獨逸人のものでもなく、希臘人のものでもなく、將又、ラテン人のものでもない。最も聰明で勤勉、且最も道德的のものの掌中に歸すべきである。」と云つてゐる。日本民族の將來を思ふ者は、當にこの至言を服膺すべきである。

（田中寛一―日本民族の將來）

さし出づるこの日の本の光よりこまもろこしも
春を知るらむ

（本居宣長）

フイエ　フランスの哲學者。（一八三八―一九一二）

アングロ-サクソン　第五世紀の頃獨逸の北西部よりイギリスの地に入り、今日のイギリス人の主なる祖先となりし種族。

ラテン　民族の名。歐洲西南部に多く、文藝美術の技に長ず。イタリヤ・フランス・イスパニヤ・ポルトガル等の民族これに屬す。

田中寛一　文學博士。東京文理科大學教授。岡山縣の人。

日神　天照大神を申し奉る。
北畠親房　吉野朝の忠臣。正平九年歿。年六十三。（一九五二―二〇一四）
神皇正統記　一卷。親房の著。神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたるもの。
草莽　サウマウ。
披瀝　ヒレキ。
頌辭　ショウジ。

二〇　昭和日本

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我が國のみ此のことあり。異國には其の類無し。此の故に神國といふなり。」とは、北畠親房の神皇正統記の開卷第一に特筆大書したる文字なり。今や我が日の神の御子は、天壤と共に萬世一系窮りなき寶祚を嗣がせ給ふ。吾人草莽の小民、恭しく茲に忠良なる帝國臣民の至情と赤心とを披瀝して、一片の頌辭を奉る。

徳富猪一郎

皇室典範　皇位の繼承等について規定せらるゝ法典。
昭乎　セウコ。
宣命　國語を用ひて天皇の大命を宣布する公文書。
舊章・古典

謹んで按ずるに、皇室典範第十條に曰く、

天皇崩スルトキハ皇嗣卽チ踐祚シ祖宗ノ神器ヲ承ク

と。神器とは鏡・劍・璽の三種の神器を云ふ。此の神器の、皇位の御守たることは、國史の上に昭乎として天日の如く瞭かなり。蓋し天子の位、一日も曠しくすべからずとは、歷世の宣命にも明記せられたる所なり。國家の變故に際する毎に、帝國の舊章・古典は、恆に吾人の指導者たり。今や親しく其の實物教訓に接す。吾人臣民は自ら顧みて、悠久なる歷史を持つ日本帝國の臣民たることを、無上の幸運にして且光榮たりと感激す。

恭しく惟みるに、今上天皇陛下には、天資聰明、仁孝の德、蚤

百揆　ヒヤクキ。
福祉　フクシ。
冥加　ミヤウガ。
感佩　カンパイ。深く心に感じて忘れざる意。

に天下に治し。攝政として先帝に代り、庶政を總べ百揆を攬り、其の御經驗や頗る多大なり。而して皇太子として世界を周遊あらせられたる如きは、國史上未曾有のことたり。吾人臣民は、洵に陛下の統治の下に、其の生を享け、其の業に就き、其の志を遂げ、其の務を果すことを得るを以て、比類なき福祉とし、冥加と感佩す。

皇政維新の大改革以來、既に六十年を經過せり。而して帝國の國運は、世界の變遷と與に、勢ひ變遷せざるを得ざるものあり。特に世界大戰以來、世界に於ける無比の大國たる露、無比の強國たる獨、無比の舊國たる墺の三大帝國は、其の國命を革め、而して其の以前、東洋に於ける一大帝國たり

宣統帝　清朝最後の皇帝。西暦一九一二年退位。
巍然
一天四海
善處
形而下　形にあらはれたるもの、卽ち物質。

し清國も、亦宣統帝位を去りて、中華民國となりぬ。今や世界の中に於て、帝國の名實兩つながら全くして、巍然として列國の表に聳立するものは、東洋に於て大日本帝國あり、西洋に於て稍これに庶幾きもの、大英帝國あるのみ。

世界大戰の結果は、從來把持したる國際政局の平衡を打破して、未だ整一せる新局面を開展せず。一天四海看來れば、大風雨大洪水の後たらずんば、大火事の後たり。此の間に介在して善處せんとす。我が大日本帝國の前途も亦難いかな。

而も其の無秩序は、單に形而下の事のみならず。今日は世界に於ける思想上の一大混亂期にして、我が日本帝國も

驚波駭浪 キヤウハガイラウ。

中樞

亦其の驚波駭浪の中に立てり。物質的の鎖國の不可能なる如く、思想上の鎖國は、猶更不可能とする所にして、此の一大混亂期に際する吾人の覺悟としては、徒に外來の惡思想・惡傾向を防止するにあらずして、我自ら我が固有の本領を發揮せざるべからざるにあり。所謂彼の惡を禁ずるにあらずして、我の善を奬むるにあらずんばあるべからず。而して其の善思想・善傾向の泉源は、主として我が國民の中樞たる皇室にこれを求め、且これに則る事に力を致さざるべからず。

我が國民の忠良なることは、國史の證明する所なり。而もこれ國民が獨り自ら忠良なるにあらずして、我が皇室の

涵養 カンヤウ。

太平記 四十卷。戰記物語の一。花園天皇より後村上天皇に至る凡そ五十年間の歷史。

脫線的言動

逞しう 逞しく。

培育

寒心

須臾

恩德、よく國民の思想を涵養し、育化し、其の性情を感發し、興起せしめて、こゝに至らしめたるなり。

如何なる場合にも除外例はあり。若し仔細に國史を探求せんか、我が國民の少くとも或部分に於ては、其の忠良性を失墜したる場合、決して皆無にはあらず。一部の太平記を披きても、如何に我が國民の或者が、脫線的言動を逞しうしたりしかを知るべし。若し徒に國民の忠良性に依賴し、これを培育し、これを補充し、これを長養せしむる所以の道を竭さざるに於ては、其の極或は寒心すべき結果を來さざるとも限らず。此の一義は、須臾も忘るべからざる要件にして、殊に現今の世界思想混亂期に於て最も然りとす。

壯言美辭

洶涌　キョウヨウ。波のわきたつ勢ひ。

掀翻　あがりひるがへる。

宸慮　シンリヨ。

奬順　ショウジユン。

乾德　ケントク。天皇の御德。

振古　古よりの義。

恢弘　クワイコウ。

今日は國家多難の秋なり。如何に壯言美辭を以て泰平を謳歌せんとするも、我が帝國が世界的大波瀾の洶涌中に掀翻せられつゝある實狀を看過する能はず。吾人臣民は、かゝる多難の時に際し、至尊の御新政を創始せられ給ふにつきて、深く宸慮を惱まさせ給ふを拜察し奉らざるを得ざるなり。而も我が國民は、悉く皇室中心主義者にして、至尊の御導きには、智愚・賢不肖を問はず、皆奬順せざる者なし。今日の急務は、たゞ至尊の乾德天の如き範を垂れ給うて、我が臣民を御指導あらせ給ふ一事に存す。而してこれ實に明治天皇の振古未曾有の皇運を恢弘あらせ給ひたる所以なりしなり。恐れながら新政の典型は、一にこれに基づか

六合　リクガフ。

八紘　ハツクワウ。

宇　天下の義。

ざるべからず。

抑〻神武天皇の業を創め給ふや、六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて而して宇と爲すの大規模を建てさせ給ひぬ。明治天皇の御代を知ろしめすや、首めに五箇條の御誓文を立て給ひ、

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ　朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

と宣へり。而して天皇は、實に其の御言葉の如く行はせ給ひぬ。否御言葉以上に行はせ給ひぬ。

日本帝國臣民の尊皇心は、明治の御代、殊に其の末期に至

りて、最も深厚、熱烈に發揮せられたり。而してこれ國民の忠良心が、偶然に勃興し、一時に突發したるにあらずして、實に我が明治天皇の盛德の、國民を感化し、知らず、覺えず、こゝに至らしめたるものなりしなり。次いで大正の御代は、實に其の聖澤の中より出で、先帝よくこれを守らせ給ひしによりて、彌隆運を成しゝものと信ず。

草莽の微臣、此の國家の大事に際し、感迫り、情熱し、自ら裁する所以を知らず。たゞ恭しく滿腔の赤誠を披瀝して、天つ日嗣たる今上天皇陛下の萬歲を頌し奉るのみ。而してこれ實に我が帝國の忠良なる臣民の、心底より出で來りたる至誠の祈願なり。

（德富猪一郎―昭和一新論）

滿腔　マンカウ。腹一ぱいの意。
天つ日嗣
德富猪一郎　蘇峰と號す。評論家。貴族院議員。熊本縣の人。文久三年生。

自修文

一　蜜蜂

何とも聞き知らない物音――若葉にそよぐ晝の風にしては鋭く、家の前の小石道に軋るタクシィにしては圓みがあり、それがばさばさとつゞいて、裏木戸の邊へ落ちた。出てみると、一脈の雨雲といつては大き過ぎるが、何處から來たとも分らぬ蜂の大群が、樫の枝をかすめて、小さな物置の周圍に、亂れ、靡き、固まり、ほぐれ、飛び上り、舞ひ下つた。蜂は蜜蜂だ。

驚き、あわててゐるところへ、御用聞達があれよ〳〵と集つて來る。肥つた爺さんが天秤棒を置いて覗く。又隣の子守や、往きと

タクシィ　辻自動車。
あわてる
御用聞

をかしい

物識顔

も還りとも分らぬ通行人達までが垣のなかへ入つて來る。しかしそれらの人々が、いづれも刺されては大變と、用心しながら見てゐるのは何となくをかしい。結局蜜蜂は物置の側の塵箱へ、段々とはひり込んで、早速一かたまりに、うよ〳〵と巣をつくり始めたやうだ。

「これはお宅へ福が舞ひ込んだのです。お飼ひになつて御覽なさい、樂みなものですよ。」

と物識顔に藥局の御用聞などがいふ。

折角來た蜜蜂だから飼つてみるのも面白からう。しかしさうする爲には、先づ巣箱から造らなければならないが、不器用な自分にはそれが出來さうもない。それで結局賣つてゐるのを買ふことにして、家の一人が出かけたが、生憎出來合が無かつた。

心當り

宿直

夜になつて考へてみるまでもなく、一體この蜜蜂には主がなければならない。近處で蜜蜂を飼つてゐる家は無いかと、家族中で考へてみたが、どうも心當りがない。最後にはたと膝をうつて、裏の林業試驗場のではあるまいか、さういへば、

「其處の官舍の何々さんの家に蜜蜂がゐるよ。」

と子供の中の一人がいふ。電話をかけると、宿直の人が、

「それはどうも有難う。今係の方がゐないから、明日の朝早速こちらの數を調べて、もし減つてゐたら、もらひに行きます。」

といふ返事である。明日の朝まで宿を貸して置けばよいのだが、それにしても、受取りに來た時、まう何處かへ飛んで行つてしまつたといふのでは惡いといふ心配も起つて來る。

子供の書齋の窓から、一同が恐る〳〵塵箱を少し開けると、ゐる、

ゐる、黄色の蜜蜂のかたまりは、晝間よりも益〻大きくなつて、まだ寢ずに夜なべをしてゐるのもある。

翌朝になつても試驗場からは何の返事もないので、また電話をかけると、ゆふべの人とは違つた聲で、

「こちらでは震災前まで蜜蜂を飼つたことはありますが、最近は飼つてゐません。」

といふ。

そこで改めて巣箱を探す氣にもなれず、いつそのこと欲しい人でもあつたらあげることにしようと、或農事試驗場に相談したが駄目だつた。

小鳥などだと餌の心配もあるが、蜜蜂は自分で飛び出して自分で運び込むから、その點はいゝやうなものの、あんなに箱のところ

お得意

にゐられては、塵が捨てられないので困る。出入りのタクシィ屋さんが來て、ビールの空箱に穴をあけて、その穴の周圍に砂糖を塗つて、塵箱の上へかざしたが、巣作りにいそしむ蜜蜂の一匹すらが顧みようとしないのは無理もない。

そのうちに、また藥屋さんの番頭さんがあらはれて、

「お得意に欲しいといふ方がゐますが、上げてくれませんか。」

といふ。殺さないやうに飼つてくれるなら、あげるといふことになつて、その夕方、番頭さんは小型の風雅な巣箱を抱へた一人の男をつれて來た。

さすがに專門家の爲事だけあつて、蜜蜂は首尾よく巣箱の方へ移つた。夜更けに藥局の番頭さんが、その巣箱を自轉車に乘せて持つて行つてしまつた。記念に、蜂の巣の小さな一つをもらつた

標本（ヘウホン。）

さば〳〵　清々したさまにいふ語。

土岐善麿　歌人。東京朝日新聞記者。東京市の人。明治十八年生。

が、これは翌朝、末の子が學校へ持つて行くことにした。理科の標本として先生に上げるのだといふ。

蜜蜂が欲しいといつた藥局のお得意は、何處の人かといふことも聞かなかつたが、その後何ともいつて來ないところを見ると大分遠方の人らしい。

その後、蜂屋の語つたところによると、この蜜蜂は純粹のイタリヤ種で、買へば何十圓もするとか。しかし、そんなことは僕らの家庭にとつては、まことにさば〳〵した涼み話の一つである。

（土岐善麿―文藝遊狂）

手紙には狸臺には鯉を載せ
竹の子は盜まれてから番がつき

（川柳）

黴　カビ。

立秋　大暑の次の氣節、秋のはじめ、陽曆八月七日頃。

蟋蟀　コホロギ。

秋の彼岸　秋分の前後三日をいふ。

二　雁の聲

宵闇の空にまう雁の聲が聞えるやうになつた。飛行機などが時々空中を轟かすので、雁の飛ぶのも少くなつたやうにも思ふが、それでも渡り鳥はまう空を渡つて來るやうになつたのである。

さういふ時節が來た。この夏は、避暑にもゆけず忙しく働いて居り、輕井澤へんに避暑してゐる友などから繪葉書などをもらふと、ひとり寂しく思ふこともあつたが、雨が頻りに降續いて、盛夏らしくなく、書物にも著物にも黴が吹き、梅雨時の再現らしき日が續いたかと思ふと、何時の間にか立秋になつてしまつた。

そのうち蟋蟀などが鳴いて、秋の彼岸になつた。夏の休暇中元氣を盛り返した人々も勤勉に立働き出したが、夏の休暇中休む暇

のなかつた人々も、何か新鮮な爲事にありついたやうな氣持になつて立働いてゐる。蠶の出來も惡く、田畑も不作だらうといふ心配が、一時人々の心を領してゐたが、美しい天氣が幾日も續いて、再び愁眉を開くやうになつた。栗の實も金に色づいて微笑んで落ちた。

雁

雁の聲はもの哀れである。それであるから、古人もこの聲に心を潛めて詠歎した。それらの詠歎は詩として今に殘つてゐるから、僕等は現今その詠歎に接することが出來る。芭蕉の「病雁の夜寒に落ちて」の句の如きは、今もなほ僕らの身に沁み徹るのを覺える。

愁眉を開く

病雁の　病雁の夜寒に落ちて旅寢かな。

舶來
花鳥風月
沈滯　しづみとどまること。
味はひ。
感覺
現實
ゆとり
くつろぎ。餘裕。
ミレエ　フランスの農民畫家。（一八一四—一八七五）
陳腐
齋藤茂吉　醫學博士。歌人。山形縣の人。明治十五年生。

舶來の近代主義は、西洋流であつたから、花鳥風月を除去しようとし、風流は一顧の價もないものとせられたことがある。しかしこれも總ての沈滯の氣を破るのに利目があつたと僕は思ふ。

たゞ、雁の聲の味はひは、これを直接の感覺にうつたへ、現實のものであると飽くまで理解することによつて、はじめて古人の感情と竝行して行くことが出來るのであらうか。

一日の勞働を終へ、少くとも一時のゆとりを得た時に、それであるから、僕等は雁の一聯を小手をかざして見てゐるミレエの畫境にも參入することが出來るのであつて、これは必ずしももはや一通りの陳腐ではない。況して此處は佛蘭西ではなく、汀の葦に霜の烈しく結ぶ國柄であることを、僕は今思ふのである。

（齋藤茂吉—念珠集）

三　亡

人物　海賊の頭。
　　その手下五人。甲・乙・丙・丁・戊。
　　その他島の人多勢。
時　五六百年前。
處　瀬戸内海の阿波に近き小島。

第一場

海岸の小高い岡にある神社の玉垣の前、二基の高麗狗が左右に立つてゐる。右側の高麗狗の上に、海賊の頭が跨がつてゐる。手下の五人が玉垣の上に乗つかつたり、高麗狗の臺に腰かけたりしてゐる。

玉垣　神社の垣。

頭　どうぢやらう。うまくこの島を逃出す工夫はないものかなあ。まう二十日にはなるぢやらう。どうも少し退屈した。うまい酒の一杯も飲みたい。初めは命拾ひをしたと思つて神妙にしてゐたが、かう長引いては、やり切れない。

乙　島人たちは俺達を普通の船頭だと思つて、徳島の御番所まで送り屆けてやると言つてゐる。

甲　御役人の手に渡されようものなら、折角助つた命が臺なしぢや。

丙　巧く船を盗むより外に、島を逃出す工夫はあるまい。

丁　だが、この島の漁船のやうな、ちつぽけなものでは、何にもならぬ。せめて三十石か五十石の船が來るとよいなあ。うまくこの濱へかゝれば、それを奪ひ取つてやるんぢやが。

頭　さうぢや。たゞ逃げるだけなら、今だつて逃げられるのぢや。だが、四國の島ぢや。向地へ逃げたところで仕方がないものな。

御番所　番人の詰所。

石　石は古、日本形船舶に用ひし積量の單位の名。

岩乘（ガンジョウ。堅固。）

俺達が海の上へ逃げるには船がいる。海賊船になるやうな岩乘な船が、うまく船がかりしてくれると好いのぢやがなあ。

乙　おい。靜かに、靜かに。向うから藤六とか藤兵衛とかいふ男がやつて來たぜ。

海賊、皆だまる。島人一人、大きい魚籠（びく）をかつぎながら出て來る。高麗狗に乘つてゐる頭を見咎める。

島人　おい、おい。それに乘つちやいかん。おりろ、おりろ。

頭、不承々々におりる。

島人　このお狗樣に觸つてはいかんぞ。これは島の守神同樣に大切なもんぢや。この近處へ集つてはいかん。あちらへ行つてくれ、あちらへ。

海賊達　よし〳〵、合點ぢや。

島人　この島の世話になつてゐる間は、俺等の言ふことを聞いてくれねばいかん。此方衆は、船に乘ればどんな優れた船頭衆か知らんが、とにかく俺等に難船を助けられたのぢや。この島にゐる間は、おとなしくしてゐてくれ。この高麗狗は大切な守神ぢや。

頭　それはまた何故にぢや。

島人　此方衆は他國者ぢやから、知らんのぢやな。昔この島に尊いお坊さんがお渡りになつたことがあるのぢや。その時に色々とあらたかな功德をお示しになつたが、さていよ〳〵島を去る時に、「さて〳〵、お前達には氣の毒ぢやが、この島は百年の後には海中へ消えてしまふ島ぢや。お前達には見えぬだらうが、それが地形の上にちやんと表れてゐる。」と仰せられた。島人等はそ

（此方衆　コナタシュウ。おまへさんがた。）
（あらたか　功德　クドク。）

のお坊さんを深く信心してゐて、誰一人その言葉を疑ふ者もなく、子孫の爲に歎き悲しんだのぢや。すると、その聖は、島人の歎を哀れに思し召して、「それは天地の定まる命數で、人間の力でどうすることも出來ぬが、そのために命を失ふ人々が不便だから、それだけはわしが法力ですくつてやらう。」さう仰せられて、急に二臺の高麗狗を彫つて下さつたのぢや。そして、仰せられるには、「凡そ百年の後に、この高麗狗の兩眼に血が滲むことがある。その夜こそ、大暴風雨が起つて、この島の亡びる時ぢや。ぢやから、血が滲んだと見たら、遲滯なく島を離れよ。疑ふ者は命を失ふぞ。」と仰せられた。俺等はそれを子供の時からよく言聞かされてゐる。その大切な高麗狗といふのがこの高麗狗ぢや。

海賊等は今更のやうに高麗狗をじろ〳〵と見る。

命數　自然の定まれる結果。

法力　ホフリキ。

頭　なるほど、それは大切な高麗狗ぢやな。（兩眼を覗き込みながら）ぢやが、まだ大丈夫ぢやな。少し石が黑ずんでゐるが、この鹽梅では十年や二十年は大丈夫ぢや。

島人　馬鹿なことを言はつしやい。俺等は何時そのお知らせがあるかと、びく〳〵してゐるのに。この前を通る時は、誰でも氣をつけてお狗樣の眼を見ることになつてゐるのぢや。それでは皆の衆、以後はこの高麗狗をおろそかに思ひなさるな。

海賊達　よし〳〵、合點ぢや、合點ぢや。

島人去る。海賊達、なほ高麗狗の周圍にうろ〳〵してゐる。

甲　馬鹿々々しい。こんな恰好の惡い狗だか猪だか分らない高麗狗に、そんな功德なんかあるものか。

頭　いや、かういふ片田舍の島人達といふものは、えてして馬鹿な

恰好　カッカウ。

お天道様

ことを本氣にするものぢや。

丁　馬鹿々々しい。こんな岩乘な岩ばかりの島が消えてなくなる道理がない。お天道様が西から出れば知らないが。

乙　おい、どうだい。ものは相談だが、おれは一工夫ついたぞ。

甲・丁　何ぢや、何ぢや。

乙　この高麗狗の眼に惡戯をしてやるんぢや。

丁　惡戯つて、何ぢや。

乙　知れたこと。この高麗狗の眼に血を塗つてやるんぢや。

丁　なるほど。

乙　さうすると、島人等が泡を食つて逃出すぢやらう。きつと逃出すよ。みんな居なくなつてしまふぢやらう。

甲　そのどさくさまぎれにつけこんで、此方も島を逃げようとい

ふんぢやな。

乙　さうぢや。

丁　そいつは巧い考ぢや。

乙　どうぢや、頭、巧い考ぢやらう。

頭　巧く行かなくつても、退屈まぎらしには可からう。巧く行つたらお慰みぢや。

丁　よおし、俺が腕を突いて血を出してやる。

乙　よせ、よせ、そんな痛いことは。……彼處に先刻から、犬ころが遊んでゐる。あいつを殺して血を出してやらう。

乙、舞臺の外に去る。

甲　面白い。

丁　なるほど面白い。島へ來て初めて面白い氣がする。

頭　巧く引懸つてくれると面白いがなあ。

乙、犬ころの死骸を持つて來て、その犬の血を取つて、高麗狗の兩眼に塗る。

丁　それで可い、それで可い。

甲　俺達は彼處の松林へ行つてゐて、そつと此方の樣子を見てゐよう。

空虛

六人連れだつて去る。舞臺暫く空虛。十五六の娘二人、籠を携へて通りかゝる。神社の方へ向つて拜む。ふと高麗狗を見る。

娘の一　あら、大變ぢや。血ぢや、血ぢや。

娘の二　嘘ぢやらう。血が著いてゐりや、大變ぢやぞ。

娘の一　嘘なもんか。此處へ來て見さつしやれ。

娘の二　（近づいて見る）あゝ、ほんに血ぢや、血ぢや。これは大變ぢや。

をぢさん、をぢさん、早く〳〵。

騷然（サウゼン。）

娘二人、悲鳴を上げながら狂奔する。島人、二人三人五人六人と、次々に四方から走つて來る。「なるほど血ぢや。」「血ぢや、血ぢや。大變ぢや。」「血ぢや、血ぢや。村中へ知らせろ。」「鐘を打て。」「大變ぢや。高麗狗の眼が赤いぞ。」「島の最後が來たぞ。早う島中へ知らせろ。」島人たち口々に絶叫しながら、右往左往する。全島騷然として、一時に混亂する。

第二場

前場と同じ。同日の午後。島は再び靜寂に返つてゐる。以前の高麗狗の前に、海賊達は毛氈を敷き、家具財寶類を積重ね、銘々に美服をまとひ、酒樽を置列べ、酒宴を開いてゐる。乙、藁に差した錢を持つて出て來る。

金目な物

乙　まだこんな物が殘つてゐた。ゆつくり搜せば、金目な物がま

だ澤山あるぢやらう。

丁　まう島人達は一人もゐないか。

乙　まうゐない。最後の船も半里ばかりは漕出してゐるぢやらう。

戊　これでやつと一安心ぢや。

頭　さうぢや。久しぶりにうまい酒が飲める。なか〳〵好い味ぢや。錢はすつかりで幾らある。

甲　五百貫文位はあるぢやらう。

乙　船も出來かゝつた船が、船造場に殘つてゐる。あれを今夜中に何とか仕立てて逃出すのぢや。明日の朝になると、島人等があわてて歸つて來るぢやらうから。

頭　あはゝ、あはゝゝ、馬鹿な奴等ぢや。巧く一杯喰はされて、あ

貫文　古の貨幣の單位。

のあわてやうは何といふ事ぢや。

甲　明朝、島が殘つてゐるのを見たら、どんな顏をするぢやらう。

海賊達　あはゝゝゝゝゝ。

頭　馬鹿な阿呆ぞろひぢや。

海賊達　あはゝゝゝゝゝ。

とたんに、さつと吹起る一陣の風、激しく砂をとばす。

乙　何だ、ひどい風ぢやなあ。

二陣三陣ごう〳〵と吹募る。

甲　急に吹出しやがつた。

丁　（空を見上げる）何時の間にか空が眞黑になつてゐる。

ぽつり〳〵と大粒の雨が降つて來る。

戊　雨だ。しけるのぢやな。

阿呆　アハウ。

しける　海上風雨盛んなること。

頭　（ふと不安になる）島が消えて失くなる時は、大暴風雨が起ると言つたなあ。

皆不安らしい顔を見合はせる。

乙　頭、何を下らないことを言ふのぢや。俺が高麗狗の眼に血を塗つたのぢやぜ。

恐ろしき雷鳴。風雨、勢ひを増す。皆恐れをのゝく。

頭　おい、眼を洗へ、高麗狗の。

丁　合點ぢや。

丁は御手洗の水を手拭につけ、高麗狗の眼を洗ふ。血は少しも落ちず、却つて眼の中から流れ出すやうだ。

丁　や、落ちるどころか、眞赤な血が後から〳〵と流れ出して來る。

頭　えつ。

御手洗（ミタラシ）。手水所の意。

乙　そんな馬鹿なことがあるものか。

乙も高麗狗に近づき、懸命に眼を洗ふ。甲・丙・戊、皆これにならふ。風雨・雷鳴のうちに、海賊どもは狂氣の如く眼を洗ふ。血は少しも落ちぬ。風雨益〻募り、電光・雷鳴は愈〻激しい。

乙　あゝ、いけない、消えない。

甲　どうしても消えない。

乙　こんな筈はない。あゝ、いけない。

丁　何だか、島が少しづつ下がつて行くやうぢや。

頭　（ふと後を見る）あゝ、駄目ぢや。見ろ、潮があんな處に來た。あの岩があんなに沈んでゐる。

丁　あゝ、あすこの岩はまう半分沈んだ。

乙　あゝ、いけない潮ぢや、潮ぢや。

ほんたう

晦冥　クワイメイ。くらきこと。

菊池　寛　小說家。香川縣の人。明治二十二年生。

頭　あゝ、まう駄目ぢや。困つた。ほんたうぢや。島人の言つた、ことはほんたうぢや。

六人右往左往して遁れようとする。雷鳴・風雨の音の中に、奔流の如く押寄せて來る海潮の物凄い音。その中に斷續する人間の悲鳴。天地晦冥の中に、高麗狗の眼だけが赤く爛々と輝いてゐる。――（幕）――

（菊池　寛―菊池寛全集）

常用漢字表

（一）本表ニナイ漢字ハ假名デ書ク。
（二）固有名詞ニハ本表ニナイ文字ヲ用ヒテモ差支ナイ。タヾシ外國（支那ヲ除ク）ノ人名地名ハ假名書トスルコト。
（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞オヨビ助詞ハナルベク假名デ書ク。
（四）外來語ハ假名デ書ク。

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【ノ】久之乏乗【乙】乙九乞也乳乱(亂)【亅】了事【二】二互五井【亠】亡交亦京亭【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使来(來)例侍供佳依侮侯侵便係促俊俗保俠信修俳俵俸併(倂)倉個倍倒候借倫倶仮(假)偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚偽(僞)僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇 先光 兌克 免 児(兒)

【入】入内全両(兩)【八】八公六共兵具典其兼【冂】冊再【冫】冬冷凉准凌凍【几】凡【凵】凶出【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺剌(刻)則削前剛副割創剰(剩)劇劍剤(劑)【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝労(勞)募勢勤勳励(勵)勧(勸)【勹】包【匕】化北【匚】區【十】十千升午半卑卒卓協南博【卜】占【卩】印危却卵卷卽【厂】厄厘厚原厥【厶】去參(參)【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告周味呼命和咽哀品咸員哲唐唱商問啓唯善喉喜喪單喫嗣嘉器噴嚴嘱(囑)【囗】囚四回因困固国(國)囲(圍)園囚(圓)図(圖)團【土】土在 地坂 均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪 報場 塔塗 塵境 墓堺(堺)増墨 墮壁 壇壓壞 壌【士】士壮壱(壹)寿(壽)【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妙妨妥妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠婚婦娼婿媒嫁嫡嫌孃【子】子 字 存 孝 季 孤 孫 学(學)【宀】冗(冗)宅 守 安 完 宏 宗官 定 宜 客 宜 室 宮 害 宴 家 容宿 寄 密 富 寒 察 寢 実(實) 審写(寫)寛 宝(寶)【寸】寸 寺封 射 將 專 尉 尊 尋 對 導【小】小 少 尚【尢】就【尸】尺 尼尾 尿 局 居 屆 屈 屋 展 層 履 属(屬)【山】山 岡 岩 岳 岸 峠峯 島 峡 崇 崎 崩【巛】川 州巡 巣【工】工 左 巧 巨 差【己】己【巾】市 布 帆 希 帝帥 師 席 帳 帶(帶) 常 帽 幅 幕幣【干】干 平 年 幸 幹【幺】

幻幼幾【ㄴ】床序底店府度座庫庭庶康廉廊廃(廢)廣廳(廳)【廴】延廷建廻【廾】弄弊【弋】式【弓】弓弔引弟弱張强彈【彡】形彩彫彰影【彳】役彼往征待律後徐径(徑)徒(徒)得從(從)御復徴徵德徹【心】心必忌忍志忘忙忠快念怒思怠急性怨怪怯恐恥恨恩恭息悔悟患悖悲悼情惑惜惠惡惟惰悩(惱)想愁愉意愚愛感慈態慕慘(慘)慢慣慨慮慰慶慾憂慎憐憚憲憶憾憤懇應懲懷懸恋(戀)【戈】成我戒戰戲(戲)戴【戸】戸戻房所扇【手】手才打扱扶批承技抑投抗折抱抵押抽拂拍拒拓拔拘拙招披拜括拳拾持指振捕捧捨掃授掌排掛採探扣(控)推接提揚換握揭揮援描挿損搖搜摘携摩撫択(擇)撃操担(擔)拠(據)擬擴摂(攝)【支】支【攴】收改攻放政故叙(敍)敎敏救敗敢散敬敵敷数(數)整【文】文【斗】斗料斜【斤】斤斥斬斯新断(斷)【方】方施旅旋族旗【无】既【日】日旦旨早旬旭昇昌明易昔星春昨是映昭時晩晝普景晴晶智暇暖暗暑暮暴曆曇曜【曰】曲更書曹曾替最會【月】月有朋服朕朗望朝期【木】木未末本札朱机朽杉材村束柿杯東松板枕林枚果枝枯架柄某染柔査枢柱柳栗校株根格栽桃案桐桑梅条(條)梨械棄棋棒棟森棺植楠業極栄(榮)構概楽(樂)楼(樓)標樞模様(樣)樹橋機横檄檢櫻欄権(權)【欠】次欲款欺歌歎歐歡(歡)【止】止正此歩武歳歴帰(歸)【歹】死殊殉殖残(殘)【殳】段殺殿毀【毋】母毎毒【比】比【毛】毛【氏】氏民【气】気(氣)【水】水氷永汁求汗汚江池決汽沈沒沖沙汰河沸油治沼沿況泉泊法波泣泥注泰泳洋洗津洪活派流浦浪浮浴海浸消渉液淑涙淡淨淫深混清浅(淺)添減渡溫測港渇湖湧湯渊(淵)源準溢溶溺滅滋滑滯(滯)滴滿(滿)漁漂漆漏演漠漢漫漸潔潜(潛)潮沢(澤)激濁濃湿(濕)済(濟)濱滝(瀧)湾(灣)【火】火灰炎炊炭烈無然煉煮煙照煩熟熱燃燈燒営(營)爆炉(爐)【爪】爪爭為(爲)爵【父】父【爻】爾【片】片版牌【牙】牙【牛】牛牧物牲特犠(犧)【犬】犬犯狀狂狩狹猛猫猶獄独(獨)獲猟(獵)獻(獻)【玄】玄率【玉】玉王玩珍珠班現球理琴環璽【瓦】瓦瓶(甁)【甘】甘甚【生】生産甥【用】用【田】田由甲申男町界畏畑畜畝略番画(畫)異畳(留)當畳(疊)【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾病症痘痛痢療癖【癶】登発(發)【白】白百的皆皇【皮】皮【皿】皿盆益盛盜盟尽(盡)監盤【目】目盲直相省眉看眞眠眼着睡督【矢】矢知短【石】石砂砲破研(研)硬硯碁碎碑確磁磨礎【示】示社祈祕祖祝神票祭禁禍福禦礼(禮)【禾】秀私秋科秒租秩移税程稚種称(稱)稻稿穀積穂穩【穴】穴究空突窃窒窓(窗)窮【立】立章童端競【竹】竹竿笑笛符第筆等筋筒答策算管箱節範築篤簡簿籍【米】米粉粒粘粗粹精糖糞【糸】系紀約紅紋納純紙級紛素紡索紫累細紳紹紺終組結絶絡給統糸(絲)絹経(經)綠維綱網綴綻綿緊緒線締緣編緩緯練縛縣縫縮縱(縱)総(總)績繁織繕繪繭繰繼(繼)続(續)【缶】欠(缺)【网】罪置署罰罵罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽翁翌習翼【老】老考者【而】耐【耒】耡【耳】耳聖聞聯声(聲)職聽(聽)【聿】肅(肅)肇【肉】肉肖肝股肥肩育肺胃背胎胞胴胸能脈脊脅脚脫腐腕腦(腦)腰腸腹膚膜膝胆(膽)臆膺臓【臣】臣臥臨【自】自臭【至】至致台(臺)【臼】與興举(舉)旧(舊)【舌】舌舎【舛】舞【舟】舟航般舵舶船艦【艮】良【色】色【艸】芝花芽芳苑苗若苦英茂茶草荒荷莊菊菌菓栄華万(萬)落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄藏藝藤藥(藥)【虍】虎虐処(處)虛(虛)号(號)【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融虫(蟲)蚕(蠶)蛮(蠻)【血】血衆【行】行術街衝衡衛【衣】衣表衰袋袖被裁裂裏裕補裝裸製複褒襲【襾】西要覆【見】見規視親覚(覺)覽観(觀)【角】角解(解)触(觸)【言】言訂計討訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠試詩詰話詳誇諮誌認誓誕語誠誤說課調談請論諭諸諾謀謁講謝謠謹謬証(證)識譜警訳(譯)議護誉(譽)読(讀)変(變)讓【谷】谷【豆】豆豊(豐)【豕】豚象豪豫【貝】貝貞負財貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤(賤)賦質賴購贈贅(贊)【赤】赤【走】走(走)赴起超越趣【足】距跡路踊躍【身】身【車】車軌軍軒軟軸較載軽(輕)輩輸輸輯輿轉【辛】辛弁(辨辯)辞(辭)【辰】辰農【辵】辷迎近返迫迭述迷追退送逃逆透逐途通速造連週進逸遂遇遊運過道達違遙遞(遞)遠遣適遭遲(遲)遷選遺遵避還辺(邊)【邑】邦邪邸郊郎郡部郵都鄕【酉】酌配酒酢酬酷酸酔醜医(醫)【釆】釈(釋)【里】里重野量【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錄錢(錢)錯鍋鎖鎮鏡鑄(鑄)鐘鉄(鐵)鑑鑛【長】長【門】門閉開閑間閣関(關)【阜】防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊階隔隙際障隣隨(隨)險隱【隹】隻雀雄雅集雇雌双

（雙）雜離難【雨】雨雪雲零雷電需震霜霧露靈（靈）【青】青靜【非】非【面】面【革】革靴【音】音響【頁】頂項順頓預頑領頭頻題額顔願顚類顧顯（顯）【風】風【飛】飛飜【食】食飢飲飯飾養餓余（餘）餐餅（餅）館（館）【首】首【香】香【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒驅驗驚駅（驛）【骨】骨髄（髄）体（體）【高】高【髟】髮【鬥】鬪（鬪）【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄【鹵】塩（鹽）【鹿】庶（鹿）麗（麗）【麥】麦（麥）【麻】麻【黄】黄【黑】黑默点（點）党（黨）【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】斎（齊）【齒】齒（齒）齢（齡）【龍】竜（龍）【龜】亀（龜）

『注意』本表ニオイテハ（　）印ヲ附シタ原字ヲ捨テ、コレニ對スル簡易字體ヲ一般ニ採用スル積デアル。

正俗字表

正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗	正	俗
應	応	歐	欧	豔	艶	園	薗	悅	悦	穎	頴	陰	陰	遊	遊	頤	頤	廈	厦	函	函	廐	厩	回	回
羹	羹	敲	敲	效	効	更	更	昂	昂	岡	崗	蟹	蟹	解	解	閉	閉	況	況	挂	掛	會	会	謊	謊
羈	羈	器	器	棊	棋	旣	既	巖	岩	膕	膕	雁	厂	卻	却	脚	脚	況	況	館	館	羣	群	刑	刑
畫	画	臥	卧	懼	惧	區	区	躬	躬	廣	広	憩	憩	拘	拘	傘	仐	恒	恒	鼓	鼓	亙	冴	冊	冊
寛	寛	款	欵	闊	濶	獲	獲	攜	携	喉	喉	贊	賛	莊	荘	牀	床	辭	辞	謚	諡	參	参	插	挿	背	嘴
獻	献	隙	隙	叫	叫	國	国	讚	讃	像	像	証	証	識	識	即	即	廚	厨	著	着	佞	侫	奈	奈	併	併	并	并	浜	浜	氷	氷	鼻	鼻	罰	罰	覓	覓
雙	双	窗	窓	柿	柿	讃	讃	證	証	唇	唇	繩	縄	翦	剪	潛	潜	窮	窃	晝	昼	遲	遅	恥	耻	輒	輙	鐵	鉄	鬱	鬱	壞	壊	鼻	鼻	史	史	鄰	隣	稟	禀
廁	厠	柿	柿	像	像	庄	荘	床	床	穴	穴	衝	衝	整	整	腸	腸	鬪	闘	纏	纏	濱	浜	梨	梨	柳	柳	韻	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀
衆	衆	証	証	識	識	即	即	廚	厨	著	着	佞	侫	奈	奈	併	併	並	並	冰	氷	鼻	鼻	罰	罰	覓	覓	稟	禀	禀	禀	禀	禀	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀
刃	刃	繩	縄	翦	剪	場	場	腸	腸	鬪	闘	纏	纏	濱	浜	并	并	浜	浜	梨	梨	柳	柳	韻	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀
馱	駄	即	即	廚	厨	著	着	佞	侫	奈	奈	併	併	並	並	併	併	並	並	梨	梨	柳	柳	韻	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀
冢	塚	廚	厨	著	着	佞	侫	奈	奈	併	併	並	並	濃	濃	留	留	柳	柳	韻	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀
冒	冒	霸	覇	佞	侫	奈	奈	併	併	並	並	濃	濃	甕	甕	衞	衛	韻	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀
貓	猫	餅	餅	並	並	併	併	並	並	濃	濃	甕	甕	衞	衛	韵	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀
涼	凉	兩	両	濃	濃	留	留	甕	甕	衞	衛	韵	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀
溫	温	慍	慍	甕	甕	衞	衛	韵	韵	往	往	拝	拝	郎	郎	史	史	弄	弄	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀	禀

文部省檢定濟

昭和九年十一月二日　高等女學校國語科用

昭和九年七月一日印刷
昭和九年七月五日發行
昭和九年十月廿五日訂正再版印刷
昭和九年十月廿八日訂正再版發行

最新女子國文讀本（全十冊）

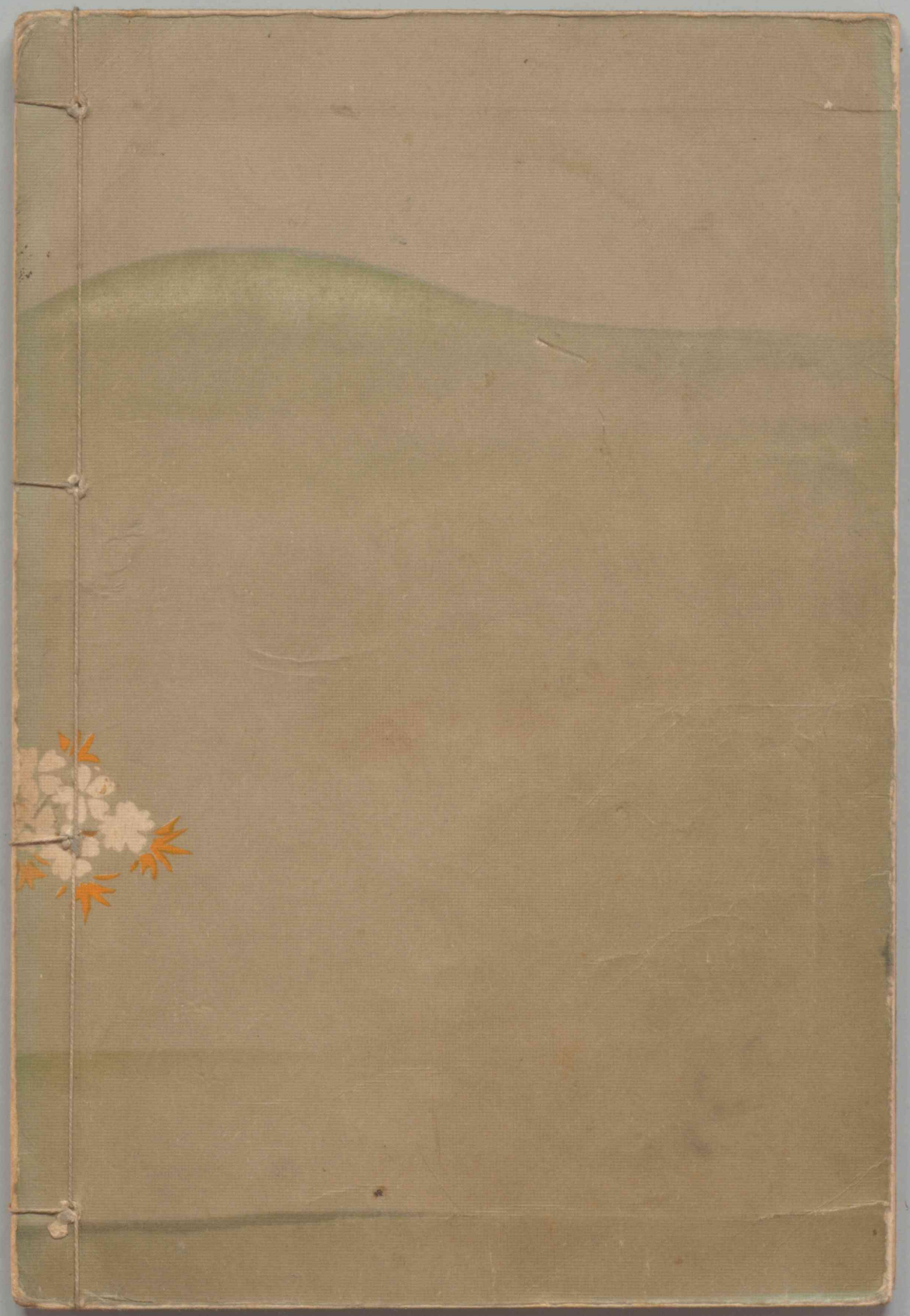
定價各金六拾錢

編者　佐佐木信綱

編者　武田祐吉

發行者　東京市神田區錦町二丁目七番地　湯川松次郎

印刷者　大阪市西區阿波座中通二丁目四番地　井下精一郎

發行所　東京市神田區錦町二丁目七番地
大阪市南區順慶町一丁目五十三番地　湯川弘文社

江戸
絵図
一面